

鳥取大学研究成果リポジトリ

Tottori University research result repository

タイトル Title	鳥取のタウン誌『スペース』をめぐる一考察：その思想的背景と書き手たち
著者 Author(s)	岡村, 知子; 安藤, 隆一
掲載誌・巻号・ページ Citation	地域学論集：鳥取大学地域学部紀要, 15 (1) : 101 - 124
刊行日 Issue Date	2018-10-31
資源タイプ Resource Type	紀要論文 / Departmental Bulletin Paper
版区分 Resource Version	出版社版 / Publisher
権利 Rights	注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted.
DOI	
URL	http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/6332

鳥取のタウン誌『スペース』をめぐる一考察
— その思想的背景と書き手たち —

岡村 知子・安藤 隆一

A Study on Tottori's Town Magazine *Space*:
Its Ideological Background and Writers

OKAMURA Tomoko, ANDO Ryuichi

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第15巻 第1号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.15 / No.1

平成30年10月31日発行 October 31, 2018

鳥取のタウン誌『スペース』をめぐる一考察

-その思想的背景と書き手たち-

岡村知子*・安藤隆一**

A Study on Tottori's Town Magazine *Space*:
Its Ideological Background and Writers

OKAMURA Tomoko*, ANDO Ryuichi**

キーワード：タウン誌、『スペース』、鳥取、学園闘争、徳永進、物語

Key Words: Town Magazine, *Space*, Tottori, Campus Dispute, TOKUNAGA Susumu, Narrative

はじめに

かつて、全国の都市にはタウン誌とよばれる小雑誌が発行されていた。田村紀雄は、「タウン誌とは、「中央集権化された出版流通制度に代表される雑誌ジャーナリズムの外にはみ出し、地域主義的な思想に立ち、それぞれの町や市で、多少なりとも自立性を求めた定期刊行物」といえるだろう。自立性の中には、マス・メディア、東京的文化、マス・カルチュアなどない何かを追及してゆく思想的自立性、これを支える経済的自活性、メンバーの中で民主的に運営してゆこうという自治性、一人一人の創意を重んずる自発性などがふくまれる。」⁽¹⁾と定義している。

さらに田村は、「タウン誌は、用語としては一九七〇年前後にその出生をたどれるが、雑誌そのものは一九五五年前後の『銀座百店』『センター』（神戸三宮）『神戸っ子』などにさかのぼることができる。」⁽²⁾としている。田村の定義によるタウン誌は1970年代後半には、全国では約400誌であり、その内訳は「東京都に約五〇誌、一都市で二種から七、八誌出されているところが札幌、青森、盛岡、仙台、千葉、京都、神戸などほぼ県庁所在地の八割、四都市で二〇〇誌ほど出されている。すると残りの一五〇誌が、それ以外の都市」⁽³⁾である。

また、地域メディアには、ミニコミとタウン誌という用語がある。田村は、ミニコミを「くちこみと

マス・コミュニケーションの中間媒体とそのコミュニケーション過程の一切をさす」⁽⁴⁾として、タウン誌とは区別している。

日本海新聞（昭和53（1978）年12月13日）は、「“権威主義”なんてクソクラエ！大資本をブッ飛ばせ！組織なんぞ頼るな！引っ込み思案よサヨウナラ！だれだって一つくらいは才能を持っている！若者ならチャレンジだ！（中略）若者たちが“手作り”文化の精神で雑誌を発行した」と報じている。その名前は、『まちの本 スペース』（この名称は創刊からのものであるが、後に様々に名称を変えているので、以下、終刊までの総称を本稿では『スペース』と表記する。）である。本稿の筆者の1人である安藤も編集・発行の中心の1人として参加していた。

また、当時、日本海新聞（昭和56（1981）年1月1日）の38面は「郷土のまちづくり」という特集で、鳥取市では、タウン誌『ふるさと鳥取』編集発行人、米子市では、タウン誌『山陰のおはなし』編集・発行人、季刊地方誌『すていたす』編集者がそれぞれエッセイを執筆している。『スペース』を含めて、鳥取県では4誌のタウン誌が存在していたことになる。（ちなみに、『スペース』にも日本海新聞からこの特集の執筆依頼がきたが、当時の『スペース』の編集方針の中心は「まちづくり」ではなく「自己実現」であるとして、執筆を辞退していた。）

本稿の目的は、第1章で『スペース』の全体像を

*鳥取大学地域学部地域学科国際地域文化コース

**しんきん南信州地域研究所

提示し、第2章で、『スペース』の主要な書き手の一人であった徳永進が提起した問題について考察することにある。(「はじめに」、「第1章」は安藤、「第2章」、「おわりに」は岡村、「資料編」は安藤、岡村が担当した。) (安藤隆一)

第1章『スペース』とは何であったか

第1節 『まちの本 スペース』の誕生

鳥取市で発行されていたタウン誌である『まちの本 スペース』創刊0号は、奥付に発行人中尾行雄、編集人美沢丈(筆者安藤のペンネーム)、印刷今井書店印刷工場とあるが、発行年月日はない。(筆者を含めた編集者たちの当時の出版に対する知識や認識の状況から、奥付に重要な要素である発行年月日を記載していない。)ただ、1980年に発行された『スペース』9号の「編集室から」に「創刊0号を出したのが、一昨年(1979)の12月8日と記憶しているから」とあり、実際に『スペース』の創刊号が発行されたのは、1978年12月8日である。

そして、『スペース』発刊5周年の時に書かれた「スペースの編集者たち」というメモによれば、「1978年10月に初めて本づくりの話合いが行われてから、5年を経過。」とあるから、編集期間は約2か月間で0号が完成している。

0号は、隔月刊を目指し、48ページで2,000部が発行されている。その後の発行状況については、1989年10月の月刊化まではなかなか隔月刊は実現できず、年に2号発行という最も間隔が空いた時期もあった。しかし、ページ数は(100ページの18号を除き)号によって多少の差はあるがそう大きな変動もなく、また、発行部数は2,000部が維持されている。

『スペース』の発刊の趣旨については、前述の日本海新聞(昭和53(1978)年12月13日)が、「この雑誌の名称は「まちの本・スペース」。ページ(スペース)を提供しますから、あなたの手であなたのページを作ってください。そして言いたいこと、やってみたいことを紙面に表現してください。雑誌のオーナーはあなた自身です。鳥取の庶民の“まちの本”にしていきましょう—というのが発刊の趣旨。」と伝えておりである。

そして、「ところでこの「スペース」は若者が、地方文化のゲリラ的総決起を期待して酒でも飲んで、鳥取を語って、本も出して—と、乏しい財布をはたいたものだ。だからこの雑誌でゼニもうけてその金でメシを食おう—なんていうのが一人もいないから、

とにかく面白い。しかも面白くてチョット役に立つ話題がたくさんある。次号が楽しみだ。」と結んでいる。

この記事は、日本海新聞の若者向けページ「水曜ヤング」(毎週水曜日に掲載され、通称「スイヤン」と呼ばれ、若者に人気があった。)に掲載されたものであるが、執筆者は森本定和記者である。森本は筆者の高校の同級生で、『スペース』の創刊企画段階からの主要メンバーであり、雑誌発行上の様々な知恵を出してくれると同時に、匿名で人気記事の「1時間散歩コース」を連載で書いてくれた。

その後もマスコミ関係者を仲間に引き入れるという『スペース』の特性は続くのである。NHK鳥取放送局アナウンサーで、後に「きょうの料理」の名物アナウンサーとなる後藤繁栄、毎日新聞鳥取支局長で、後の岡山理科大学教授の小林宏行、朝日新聞鳥取支局員で、中国広州支局長を経て、長崎県立大学教授の鈴木暁彦などである。彼らは、取材、執筆、人によってはプレゼントグッズ集めまで、ボランティアでやってくれた。

さらに、創刊当時の事情については、主要な編集メンバーの1人である筆者が、次のように書いている。

「鳥取の街は沈滞しているなあ」

「本当に面白い事のない街だなあ」

「それじゃ、オレ達で何か面白い事をやってみようや」

高校時代の旧友、石井昭君(文化センター前で着物屋「彩里」経営)との再会が、「まちの本・スペース」を生み出したといえる。

「オモシロくないとグチをこぼす前に、自分で何かをやってみよう。」これが、この雑誌の原点である。

石井君は東京から、私は神戸からUターンしたばかりで、金も人脈もほとんどなかった。

まず、二人で人集めから始めた。本屋さんを仲間に入れたいと、私の職場に本の配達をしていた富士書店の中尾行雄君に声をかけた。話らしい話をしたことなかった彼ではあったが、二つ返事でOKであった。「安藤さん達は編集に専念して下さい。販売や印刷の関係の事は、ぼくがやりますから」と、初代の発行人を引き受けてくれた。(中略)

名前は「スペース」とすることにした。「スペ

ース」とは宇宙、つまり空間の広がりを感じているし、何よりも「スペース」を開放しますという意味を持たせたかった。考えている事を自由に書いてもらう。

当時の新聞は、見出しにこう書いてくれた。「ページ提供します」「自由な発言募る」「だれでも編集に参加できる新スタイルの本」

「〇〇の事ならあの人に」「××の事を始めるなら、あの人にあいさつを」といった文化の権威主義みたいなものを打ち破りたかったので、新聞によく名前が出るような人には執筆をお願いしなかった。

石井君も私も、高校時代は新聞部に入っていたので、まず、その時の仲間をお願いした。今でこそ「死の中の笑み」など鳥取のベストセラー作家として有名だが、当時は、まだ無名であった鳥取赤十字病院医師の徳永進君、養鶏場を営んでいる川崎正矩さん、そして新聞部顧問であった鳥取西高の濱崎洋三先生などである。

(安藤隆一「地元文化へ グリラ出撃」朝日新聞鳥取支局編『私の交遊抄(中)』スペース企画 1989年10月 377~378 ページ)

このように、編集・執筆者ともこの時期の中心をなすのは、鳥取西高校の新聞部の出身者であった。

「西高新聞部伝統の魂は不羈の一語に尽きる。何事にも束縛されない自由こそが、部員の目指す心意気である。(中略)学内の恥部をもあえて真正面に取り上げ、新聞部の論調を強く打ち出し、生徒全員に学校生活向上のための意欲を喚起させようと使命感に部員達はもえていた。」⁽⁵⁾と自身も高校時代新聞部員であり、教師として顧問も務めた濱崎洋三がいつているように、この不羈の精神の延長が『スペース』を始める思想の一つの発端であった。

しかし、学校当局からの新聞部への風当たりは強く「度を過ぎた見出しがある」、「論調が片寄っている」といった批判があって、当時の新聞は職員室内では余り評判がよくなく、顧問の私は肩身の狭い思いをさせられることがしばしばであった。⁽⁶⁾と、濱崎は新聞部を暖かく見守ってくれていた。「小誌に寄稿するのは、編集スタッフに浅からぬ因縁があるからである。この小誌が、若者による地方文化へのグリラ的総決起の契機となることを期待する」⁽⁷⁾と『スペース』の発刊についても、同様であった。

第2節 『スペース』の展開

1978年12月に創刊された『まちの本 スペース』は、『タウン情報誌 まちの本スペース』、『月刊タウン情報 スペース』と名前やその性格を変えながら、1997年12月に発行された『タウン情報 スペース』通巻136号をもって、約20年間で完全にその終わりを告げるのである。(創刊0号の通巻1号から、最終号の通巻136号までの全ての号は、現在、鳥取県立図書館に所蔵されており、閲覧、利用が可能である。)

スタート当初は、「この本は自主的に参加したさまざまな人たち(女性も多数)によって支えられ作られています。専属のスタッフ(この本作りを職業としている人)は一人もなく、執筆、取材、編集、広告取りなど全て、自分の仕事の終わった後「手弁当」でやっています。」⁽⁸⁾と、全くの手弁当、無償のボランティアで、製作されていた。

発起人はわずか4人であったがこの1年間に何らかの形でこの本に参加してくれたのは、ゆうに200人を越える。書店の店員、デパートに勤める人、公務員、新聞記者、大学教授、NHKアナウンサー、喫茶店のママ、カバン屋の店長、日赤病院の医者、農民、教師、ディスコの経営者、スナックのマスター、看護婦、化粧品会社のチャームガール、教会の牧師、写真屋さん、レコード店経営者、画材屋さん、建築家それにギャラリー経営者など、ありとあらゆる職業の人達が参加してくれた。もっともこの人達が全員一同に会した事はない。(『まちの本 スペース』5号 1979年12月 42ページ)

このように、『スペース』は、無償の「参加の本」として、数多くの人に支えられていた。

そして、1984年5月発行の18号は、5周年記念号として100ページと通常の2倍以上のページ数であり、創刊以来のピークを迎えている。

「文化人気取りの人たちの同人誌」とか「もっと情報を多く載せないと買う気がしない」などとあらゆる批判を受けながら、試行錯誤の5年間。『専従を一人も置かない奇跡の編集スタッフ』という評価もあったが、とにかくこの『まちの本スペース』も丸五年を経て通巻十九号目の発行に至った。(『まちの本 スペース』18号 1984

年5月 95ページ)

しかし、1985年7月の20号では、「最初は隔月刊であったがその後は、季刊となり、さらに年2刊最近はその年2刊も危い状態となっている。創刊0号から参画しているメンバーは私とI君だけとなってしまった。／創刊以来7年、常に「鳥取に新風を！」という自負が生き残り、もはや終刊の予感のみが私達の周りを漂っている。」⁽⁹⁾となり、そのI君(石井昭)も1985年10月の次号21号にその名前もなく、「今号からタウン情報誌としてイメージを一新。若手の編集部員からの厳しい突き上げによるもの。これからは、若い発想と力に期待。老兵は消えゆくのみ。(隆)」⁽¹⁰⁾と、「オピニオン誌」的なものから、「情報誌」的なものに大きく方向転換をしていくこととなる。タイトルも「タウン情報誌 まちの本スペース」となる。

当時の全国のタウン誌は、「都市の経済性、社会的特質、発行・編集スタッフの質、人員、動機、企業化のプロセスなどによって必ずしも一様ではない」⁽¹¹⁾という状況であった。

例えば、全国人口最少県の鳥取県の対極にある東京都でも、『地域雑誌 谷根千』と銘打ったタウン誌が発行されている。地域学研究会第8回大会(2017年11月25日、鳥取市、とりぎん文化会館)で、その編集者の森まゆみは、「地域雑誌『谷根千』とその後」という講演で、「自分たちは、1984年10月に『地域雑誌 谷根千』を始めたのであるが、その目的は人々が地域で、より楽しく、生き生き生きてくため」という趣旨の発言をしている。『地域雑誌 谷根千』は、「この二十五年間の九十余冊の『谷根千』本誌を出し、その他、東京の地方叢書、保存運動パンフレット、委託出版物、地図、葉書など数十点の印刷物を制作し販売してきた。奏楽堂のパイプオルガンの復元や赤煉瓦の東京駅の保存を皮切りに三十をこえる建物の保存活用、不忍池の地下駐車場反対や富士見坂からの景観保全などの活動に参加してきた。」⁽¹²⁾と、まちづくりの運動へ、本格的に展開していった。

一方、『スペース』については、好評であった徳永進の連載を引き継いだ、同じ鳥取赤十字病院医師の片山正見は『スペース』の10年を総括してこう述べている。

「考えてみれば、スペースのこの十年は「ものを言い続ける場所」を提供することにあつたの

ではなかろうか。誰のどんな発言も気楽にいい加減に遊び半分載せてしまう。それが十年続いた理由であるし、大切な存在理由であったのだと私は考えている。

この街をどうにかする。この街をよくする。そんなことはどうでもよろしい。街がどうにもならなくたって、雑誌をつくる人びとが「遊べたら」それでいいし、読むひとが面白がってくれたらそれで十分と考えたい。(中略)「あそび、たわむれ、ゆらぎ」これが大切なものである。まじめな主張、正しい言葉なんてどこにでもころがっている。そんなものは別に人を変えはしない。人が変わらなければ街だって変わりはしない。(『まちの本スペース』30号 1988年2月47ページ)

つまり、『スペース』はこの時点では少なくとも、「まちづくり」や「地域活性化」を目指すものではなく、いわゆる「自己実現」のための雑誌(タウン誌)であった。

故に、朝日新聞鳥取版(1987年4月4日)の「記者から」の記事の中で「発行人の安藤隆一さんは「強力メンバーが去る。休刊を考えなくてはならないほどのピンチだ。街に埋もれる“助け人”を待つ」とつけ加えている。」と書かれているように、絶えず存続の危機であった。もちろん、その使命を終えれば、静かにその舞台から消えていくのも一つのいき方であったのであるが。

しかし、「何とかこの街にこうしたメディアを残したい、『スペース』の灯を消すな」という気持ちがメンバーには強く、発行人、編集者、編集室の所在地、印刷所を次々と変えていくことを含めて、様々な試行錯誤を行っていった。そうした中、特にオピニオン誌的な「まちの本」から情報中心の「タウン情報誌」への転換を行い、その性格を大きく変えて、存続を図っていくのである。

1989年の9月からは、『スペース』制作を職業とする専従のスタッフを置くことになり、念願の月刊の発行を果たすことになる。

それに先立つ1988年12月発行の『まちの本スペース』33号は、発行所が「スペース企画」となっている。これは、従来の『スペース』を編集する部門に加え、あらたに単行本の出版部門を設立するために、「スペース編集室」を「スペース企画」と名称変更したものである。設立された出版部門から、1989

年2月に『紙原四郎きりえ画文集』、同年3月に『カルチャー食』、同年6月には『私の交遊抄(上)』と相次いで単行本の出版を行っている。

特に、『カルチャー食』は「鳥取食べ歩きガイドブック」として、同種の「街の飲食店の紹介本」が珍しかったこともあって、ベストセラーとなった。この本の編集に中心的に関わってくれたのは神戸からIターンしてきた鳥取三洋電機の工業デザイナーの藤原一輝である。これが縁となって、藤原の所属する鳥取三洋電機デザイン部のデザイナーたちが、ボランティアで次々と『スペース』も編集に参加するようになる。こうした動きも、「オピニオン誌」的なものから、「情報誌」的なものへの転換の一つの契機となったと考えられる。

また、1989年4月には、東伯郡北条町(現在の北栄町)『コロロン』という鳥取県中部地区をカバーしていたタウン誌編者の井上美香と共同で、鳥取県東部・中部地域を対象としたタウン誌を発行することになり、『とっとり・くらし タウン情報誌 まちの本スペース』と改称した。

さらに月刊化された1989年10月号(通巻37号)から1990年3月号(通巻42号)までの半年間は、企画・編集はスペース編集室としながらも、発行元は、別組織の「R²エージェンシー(代表 山本利絵)」となっている。1990年4月号(通巻43号)からは、発行は「スペース企画」となり、1992年1月からは「スペース企画」は、法人化されて「株式会社 スペース企画」となる。筆者は、この法人化と同時に『スペース』から完全に引退することになる。

1978年12月の創刊から1989年10月の月刊化までと、それ以降から1997年12月の終刊までの『スペース』は、その内容や編集者(職業として携わるかどうかも含め)について、全く性格を異にする雑誌である。あえて名付けるとすれば、前者を「第1期スペース」、後者を「第2期スペース」とする。さらに、「第1期スペース」は、発刊当時の中心人物であった石井昭が引退した1985年7月の『スペース』20号(通巻21号)までを第1期前期、それ以降を第1期後期に分けることが出来る。本稿は、主に総合雑誌的性格の強い「第1期前期」対象として論じることとする。

第3節 タウン誌づくりから地域づくりへ

前述の「スペースの編集者たち」(石井昭作成)には、次のように記されている。

(5周年)

1978年10月に初めて本づくりの話合いが行われてから、5年を経過。その間0号を含めて通巻17号を出版。さまざま人が関りを持ち、色々な内容の本になりました。常に問題をかかえ、その度に何とか解決して来ましたが、5周年を迎える今、改めて総括してみたいと思います。

(なぜ?)

個人の関わりは別として、なぜ鳥取に「まちの本スペース」が生まれ発行されているかという質問をよく耳にします。正しい回答はありません。でも活字になった文章や、絵や写真が「紙つぶて」として世間に力を発揮するのです。活字を本にするのは印刷屋の仕事です。私たち編集者は著者の思いを正確に、力強く、効果的になるようにする役割を持っているのです。

時代と共に我ら鳥取を取りまく状況も変化しています。しかし私たちは、自分の生き方を真剣に考える時、「鳥取」という狭い意味での環境だけは、自分たちの力を及ぼしたいと思います。

広く、世界を見る眼を忘れてはいけないが、足元の鳥取さえ考えられない器では、生き生きとした人生を送ることは難しいと思うのです。そして個人的なちっぽけな豊かさに満足するのではなく、身近な環境を広く考えてみたいのです。

(具体的に)

まず編集者の企画がまとまれば、年に何回か「スペース」を発行する。単にそれだけでなく、行動半径を大きく持ちたい。例えば。

- ① スペース出版局から別冊を出す。
- ② イベントを企画し、実施する。(映画、コンサート etc.)
- ③ 絵画展を呼ぶ
- ④ スペース旅行をする。(ヨーロッパ、カナダ、北海道)
- ⑤ 各界で活躍する人たちと交流する。
- ⑥ 塾をする。
- ⑦ 政治参加する。
- ⑧ 商売で大儲けする。
- ⑨ 50年、100年後の鳥取を設計する。
- ⑩ スペースを発行1万部にする。

このメモの(なぜ?)の中では、その時点での『スペース』の性格をよく表している。前述の筆者の考

えは、『オモシロくないとグチをこぼす前に、自分で何かをやってみよう。』これが、この雑誌の原点である。しかし、もう一歩進めて、このメモでは、「自分の生き方を真剣に考える時、『鳥取』という狭い意味での環境だけは、自分たちの力を及ぼしたいと思います。」とある。

「鳥取県では「地域経済振興型まちづくり」から始まったが、その主たる運動の担い手である民間の団体の手法は「自己実現型まちづくり」として展開していったのである。この運動は「ジゲおこし」と呼ばれ、1980年代の中頃から、地域経済振興を目的として県行政の提唱ではじまった⁽¹³⁾のであるが、鳥取という地域にも「自分たちの力を及ぼしたい」というのは、自己実現が自己満足を超えて、地域に何らかの力を加えたいという、地域主義の萌芽と考えられる。

実際には、「ジゲおこし」が提唱される以前から、実は鳥取県には「地域おこし」の芽が育っていたといえます。つまり、民間にあった自由な地域づくりの運動を「ジゲおこし」というラベルを張って位置づけたという点が重要だと思います。(最初から全面的に官主導という訳ではなく、官民の役割分担を内包していたといえましょう。)⁽¹⁴⁾ということであり、『スペース』の求めた方向性は、単なる小雑誌を出すという個人的な経済行為ではなく、結果的に、その後日本全国で展開されている「地域づくり」や「まちづくり」といった公民あがりの運動の嚆矢であったといえる。

それでは、「スペースの編集者たち」における(具体的に)について、それぞれの項目でどう展開されたかを見てみよう。

- ① スペース出版局から別冊を出す。…1988年12月に出版部門を設立し、1989年2月に『紙原四郎きりえ画文集』、同年3月に『カルチャー食』、同年6月には『私の交遊抄(上)』と単行本を出版。
- ② イベントを企画し、実施する。(映画、コンサート etc.)…加藤登紀子アンコールコンサート、親子映画『ピーターラビットとなかまたち』の上映。
- ③ 絵画展を呼ぶ。…有料の東松照明写真展。
- ④ スペース旅行をする。(ヨーロッパ、カナダ、北海道)…実施出来ず。
- ⑤ 各界で活躍する人たちと交流する。…取材活動、原稿依頼を通して実施。

⑥ 塾をする。…「スペース執筆陣を中心に月1回毎月1日の日に例会をもっている。スペースとは別組織とし、「セミナー91」と名付けた。1991年まで少なくとも10年間は続けたいと思っている。」⁽¹⁵⁾

⑦ 政治参加する。…仲市実の鳥取市長選への出馬における、支援の市民グループへの参加。(『スペース』の中心メンバー)

⑧ ⑨ ⑩…実施出来ず

様々な夢を追って生きることも重要であるが、一定の成功が次へのエネルギーとなり、更なる持続が可能となるのである。出発は、『スペース』というメディアであった。このような実績が示す通り、そのメディアを核としながら、様々な文化活動を展開していったのである。

1990年、「第1期スペース」の中心メンバーであった筆者はその実績を買われて、鳥取県企画部文化国際課から鳥取県を紹介する書籍の編集を依頼される。『スペース』のメンバーを中心にした編集委員会(筆者と前述の元毎日新聞鳥取支局長で岡山理科大学教授の小林宏行が基本コンセプトを作り、藤原一輝がデザインと担当)を組織し、『とっとり大好き』と題したこの本は定価1,350円にもかかわらず1万部の発行を実現する。⑩における『スペース』での発行部数1万部を実現できなかったが、人口60万人の鳥取県において、『とっとり大好き』は出版物の発行1万部という数字を実現出来たのである。

1992年、当時、鳥取県の地域活性化運動を行政の立場から担当していた鳥取県企画部企画課から、「ジゲおこし情報誌」の編集・取材を「株式会社スペース企画」が依頼を受けた。(この情報誌は、同年9月に創刊準備号として、0号を発行、その中で情報誌のタイトルを募集した。タイトルは「因伯人(いんぱくと)」と決まった。)筆者は前述の通り、『スペース』から引退し「株式会社スペース企画」には参加していなかったが、『とっとり大好き』編集の実績などから、「株式会社スペース企画」の外に、鳥取県の民間の地域づくりのリーダーをメンバーとする編集委員会を組織して、その内容の企画を立案することになる。

1994年、鳥取県ジゲおこし団体連絡協議会が官民協働で設立され、その実質的運営を担う民間の地域づくりのリーダー(多くは、前述のジゲおこし情報誌「因伯人(いんぱくと)」の編集委員)による「幹事会」が設けられ、その代表幹事に筆者が就任する。

このように、『スペース』の発行という文化活動から出発した運動も、石井メモの（具体的に）の「⑤0年、100年後の鳥取を設計する。」にあるような「鳥取県の地域づくり」に繋がっていくのである。

「第1期前期スペース」の発行や編集を担ったメンバーの思想は、あくまでも、「自己実現」である。街や地域のために『スペース』を発行したのではなことは、「この街をどうにかする。この街をよくする。そんなことはどうでもよるしい。」という片山正見の指摘を踏まえ、前述したとおりである。さらに、「人が変わらなければ街だって変わりはしない」であり、こうした地域で行われている様々な「自己実現」の活動の集積が、結果として「まちづくり」や「地域活性化」といったものになっていくのである。こうした思想こそが、鳥取県の地域活性化の運動の「ジグおこし」の土台をなすものの一つであった。

第4節 『スペース』をつくる思想Ⅰ

…1960年代の後半という時代

『スペース』をつくる思想の源流の一つは、先に述べた鳥取西高新聞部の「不羈の精神」であるが、その中心メンバーが高校を卒業して、大学に入った1960年代の後半という時代も大きな意味を持っている。第1期前期スペースの編集の中心メンバーの石井や筆者、そして執筆者の徳永進（『スペース』に掲載された彼の作品の分析は、本稿の後半部分で行う。）は、いずれも1948年生まれで、団塊の世代⁽¹⁶⁾あるいは全共闘世代とよばれ、1960年代の後半に大学生活を送っている。

特に、今から50年前の1968年については、山内昌之が次のとおり述べている。

68年は、約20年後の冷戦終結やソ連解体を経て世界が大変動することを予想させる節目となった年だ。第二次大戦終結からも約20年で、20年ほどのサイクルで歴史が変わるような出来事が起きている。私は当時大学生で、68年は自分が現代史として体験した時代だ。日本はまだ、国際的には十分存在感を発揮していなかったが、平和と高度成長により独自の歩みを始めていた。（中略）西側の資本主義圏でも環境問題などひびきが目立った。パリでは、5月革命があり、日本では日大や東大の紛争があった。（毎日新聞2018年1月1日）⁽¹⁷⁾

この時期、世界では、チェコスロバキアにおける「プラハの春」、ベトナム戦争の激化、アメリカにおけるアフリカ系アメリカ人指導者キング牧師の暗殺、フランスの「パリ5月革命」など、日本でも、ベトナム反戦や全国の大学での全共闘運動など、若者たちの叛乱の嵐が吹き荒れる激動の年であった。

小熊英二も次のように指摘している。

「あの時代」の叛乱を、それぞれの立場から回顧した回想記は、数多く出ている。しかし、それらは「あの時代」の叛乱の全体像を描いたものではない。またあの叛乱がなぜ起きたのか、それが日本社会や世界にどんな意味をもち、何を残したかなどを総合的に検証した研究は、今のところ存在しない。わずかに、社会運動の先駆例として研究した論文がいくつか存在するていどである。

その原因は、複数あるだろう。時代が近すぎるため、またその時代の生きた証人が多いため、研究対象とするのがためらわれてきたこと。あれが一種の政治活動であったのか、たんなる風俗現象であったのか、それとも文化その他をふくんだ総合的な変革だったのか位置づけが人によって分かれているため、アプローチがむずかしいこと。一過性の風俗現象だったから、研究に値しないと考える研究者も少なくなかったことなどが考えられる。（小熊英二『1968（上）若者たちの叛乱とその背景』新曜社 2009年7月12ページ）

こうした考え方を受けて、この時代を生きた筆者は、若者の叛乱は「文化その他をふくんだ総合的な変革」を試みたものと考えている。

「私の場合は社会のために役に立ちたい、困っている人を助けたい、そのために医者になろうと考えたんです。でもそれは、自分が政治活動にのめりこめない代償という大袈裟かもしれんけど、オルタナティブではあったと思う。というのも、鷺田さんのクラスほど過激ではなかったけど、京大の時計台に立て籠もっていた医学部の同級生がいました。機動隊の放水を浴びて、最後にはギブアップして逮捕されるんです。私はそこまでできなかったという意味で、彼や彼らに対する後ろめたさがありましたね。」⁽¹⁸⁾と、当時、京都大学の学生であった徳永も述べているように、いわゆる政治闘争には参加していな

いが、後述する「FIWC (フレンズ・インターナショナル・ワーク・キャンプ) という名前のボランティア活動をする団体」に、文化その他をふくんだ総合的な変革のためのオルタナティブな活動として、参加している。

また、徳永は、濱崎洋三が「たしか四十三年の夏か、四十四年の春かですね。卒業生の中の無責任な連中が、大学紛争の風潮に便乗して、自分の所属する大学では何もしないくせに、母校西高の後輩には都会で生じつつある学園紛争の小型版を伝えようとなりました。(中略) 新聞部の先輩(筆者注、徳永のこと。)が深く関係していたものですから、新聞部顧問だった私にもその行動について責任がありはしないかと疑いをかけられ、ずいぶん迷惑しました。」⁽¹⁹⁾と回想しているように、本格的な政治闘争には参加していない。

燎原の火のように、全国的に広がっていた学園闘争は、「東大や日大の闘争は、六九年一月から二月には事実上終焉した。それと前後して京大で闘争が始まり、同志社大や立命館大など関西各地の大学闘争がおこり、京大の時計台が六九年九月に「落城」して終わった。さらにやや遅れて弘前大など地方大学に波及し、(中略)一〇月から十一月には、(中略)ほとんどの大学のバリケード封鎖は終わった。」⁽²⁰⁾そして、そのバリケードから出撃していった街頭闘争も「六九年末の佐藤首相訪米阻止を掲げた「十一月決戦」までには、ゲバ棒と火炎びんによる街頭闘争は完全に警察に抑えこまれた。」⁽²¹⁾という状況となった。

このように、この時代の学園闘争、全共闘運動とよばれたものは、敗北し、終焉していくのである。

第5節 『スペース』をつくる思想Ⅱ …学園闘争から「地方」「共同体」「文化」へ

演出家の蜷川幸雄は、この時代のことを次のように述べている。

僕たちがその中にいた政治の季節は、内ゲバとか連合赤軍のリンチ事件とか、運動の内部的な破綻も大きく作用して終息していった。僕たちは直接その内ゲバとかリンチといったものに加担したわけでも、どこかの党派の理論を担いだりしたわけでもない。しかし例えば、デモに参加していて池袋のほうに赤軍派が武器を持って現れたとか聞くと、胸が躍るわけだ。胸を躍ら

せたんだから、精神的に加担したんだから、責任をとらなくてはいけない。自分を裁かなければいけないと思った。

ではその自分たちを裁く視点はどこにあるかと言えば、それは普通の生活者の視点だと思ったのだ。実際、闘争に敗れた若者たちは、それぞれ自分の郷里に帰ったり、ある種のユートピア主義的共同体に走ったり、戻れる人は学校や職場に戻るなど、皆普通の生活に戻っていく時代だった。だから、その普通の生活者の視点に立った論理を作らなければならないとも思ったのである。(蜷川幸雄『蜷川幸雄・闘う劇場』日本放送出版協会 1999年5月 160～161ページ)

先に述べた『スペース』創刊当時の中心メンバーであった石井、筆者、徳永はいずれも学生時代を大都市圏(東京、西宮、京都)で過ごし、何らかの形で学園闘争に関わり、ある種の敗北感、挫折感を持って、郷里の鳥取にUターンしている。そして、上記の「学校や職場に戻るなど、皆普通の生活に戻って」いった。

しかし、彼らにとっての「普通の生活」とは表面的なものであって、この時代の若者の叛乱を「文化その他をふくんだ総合的な変革」を試みたものと考えれば、学園での闘争にかわる「オルタナティブ」なもの、例えば、徳永の場合、それは医療を学ぶ事、そして社会活動としてのワークキャンプであった。

「学生時代には、授業がなかったですから、先輩がやっていたハンセン病の患者の支援活動を手伝ったりしていました。組織は「FIWC (フレンズ・インターナショナル・ワーク・キャンプ)」という名前のボランティア活動をする団体で、私は障害者施設のペンキ塗りをしたり、道路工事を手伝ったりしていたんです。そういう、具体的にやることがあってわかりやすいし、ある意味で救いでした。」⁽²²⁾と回想しているように、奈良にある「交流の家」(「むすびのいえ」と読む。)という「らい回復者社会復帰センター」でのワークキャンプという活動であった。

ここでの経験が、郷里鳥取市の隣の八頭郡郡家町(当時)での「私都村」(「きさいちむら」と読む。)という「共同体」建設へと繋がっていくのである。

この「私都村」については、徳永進の母、徳永美枝子が次のように述べている。

突然起こった学生運動、そしてその流れがこの過疎の村姫路に押し寄せてきたのです。それは昭和四十六年の暑い夏でした。

当時この差出人である徳永進は京都大学の一年生か二年生、あの激しい学生運動をどのようにやっていたのか、母親である私にはさっぱり分かりませんでした。その後、同志数名とこの私都の姫路に「家」を建てるためのベースキャンプとして三十六万円で農家を確保し、そこで共同生活を続けて長い長い建設を繰り返していました。つまり当時あちこちでやっていたふる里づくりだったのです。(中略) そもそもこの過疎の村、姫路に目をつけたのは、ふる里づくりのためではなかったのです。学生運動のため学校は長期にわたり閉鎖され、その時、進・ヤスアキ・ヤスノリ・川口・雅洋・やす子・こずえさん達が長島の愛生園に行き、らいは全快しているけれど故郷に帰れない、その人の里帰りの場所をさがしていたのです。(徳永美枝子『私と私都村』私家版 1978年 1ページ、10ページ)

このように、徳永は「交流の家」での、目的(らい回復者社会復帰センター)と方法(ワークキャンプ)をふる里鳥取で、その実現を試みたのである。このことは、「突然起こった学生運動、そしてその流れ」と徳永美枝子が言うように、学園闘争のバリケードの中の生活の延長であった。

しかし、「結局、ひとりのらい者も帰ってこなかった。村人のどのひとりにも「わしゃあ 治ったもんならきてもええと思う」といわせることはできなかった。「らい」と「故郷」の形を私都村はまったく変ええなかった。」⁽²³⁾と表面的には、この運動は敗北するのである。

しかし、「去年の夏、私都村で暮らしたあと、ぼくが持ったのは1冊の住所録だった。らいとの、村とのつながりは、私都村内でのつながりができてからでなくては、出来ないだろう。1冊の住所録、そこからしか出発のしようがない。そこには、体温のぬくもりを感じさせるやさしい顔がある。」⁽²⁴⁾と徳永は語り、「私都村」の建設に関連した様々な活動とそれに参加した人々との繋がりこそが、その財産としている。

そして、徳永美枝子も「その時代の若者は、ヒッピーのような汚いかつこうをしていましたが、確かに根性というものを持っていたように思います。学

生でも、土方をしてお金を貯め、粗食にも耐え、自分で何かやろうとする、つまり自立心があったと思います。連帯感とといいますか、強いつながりを持っており、その上不思議なやさしさのようなものを持っていたように思います。」⁽²⁵⁾と、「根性」「自立心」「連帯感とやさしさ」というキーワードで、この運動の評価をしている。

この後、徳永は医療の世界に戻っていくのである。そして、京都国立病院、大阪吹田の同和地区診療所を経て、1978年に鳥取赤十字病院の勤務医として、鳥取にUターン、『スペース』の執筆者に加わることになる。

筆者も、当時在学していた関西学院大学の大学当局の機動隊導入によるバリケード封鎖解除という、学園闘争の政治的敗北や挫折感の中から、「交流の家」、「私都村」の運動に参加して、前述のような体験をしている。卒業後、兵庫県職員という神戸での生活を終えて、1977年に鳥取にUターンしてきた。大都市から「地方」へ、生きる場所を変え、そして「共同体」の経験を経て、タウン誌発行という「文化」へとたどり着くこととなるのである。

こうしてみると、タウン誌『まちの本 スペース』を創り出した初期の集団とは、1960年代後半に「文化その他をふくんだ総合的な変革」という目標を掲げた「若者の叛乱」に一定の敗北・挫折した若者が、鳥取という「地方」に戻り、出版「文化」を創り出すために、多くの仲間を集めた編集室、つまり「共同体」を形成していた若者たちだったのである。(安藤隆一)

第2章 身近な他者を語ることの意義

——徳永進を中心に

第1節 “優劣の基準”をめぐる欲望

濱崎洋三⁽²⁶⁾は、1963年から68年までの5年間、鳥取西高校新聞部の顧問を務め、教え子たちが中心となって創刊した『まちの本 スペース』(0号(78年)~20号(85年))に、21回にわたり、「地方史研究雑感」を連載した。その中の「連載18回 胴上げと幟ねり 祭の風流」(『まちの本 スペース』17号1983年10月)の内容を紹介するところから、第2章の稿を起こしたい。

濱崎の記事の特徴は、日本の近世期の資料に記録された興味深い事例と、現代社会に広く見られる現象とを、東西の多様な学問分野の知見を媒介として関連付け、後者に潜む問題点をあぶり出す手法にあ

る。「胴上げと幟ねり」においても、鳥取藩の歴史家・岡島正義が『鳥府志』に記述した「幟ねり」という慣習と、60年代までの鳥取西高の体育祭が、フランスの人類学者バランディエの提唱した祭の理論を媒介として結びつけられている。「カーニバルの時とは、社会全体が姿を現わし、模倣とゲームによって自らを解放し、許容しうる形での転位の効果によって攻撃と批判に自らを預け、〈運動〉のパロディーに身をまかすことによって、逆に秩序の源泉を養う時なのである。」⁽²⁷⁾とバランディエが指摘するように、江戸時代の幟ねりは、町人が武士の乗馬の技術を試し、落馬した武士を竹竿で打つことを武士が許すことで、60年代までの体育祭は、生徒たちが担任の教師を胴上げし、途中で地面に落とすことを教師が許容することで、武士と町人、教師と生徒の間に醸し出される連帯感が、日常へ回帰した後の権力支配をより安定的なものにする。しかし、県史編纂室への異動で高校現場を離れた濱崎が、82年に西高に復帰した時、「運動会」と名称を変更されたイベントからは「祭の風流」が失われ、「そこにあるのは、徹底的に管理化されたスケジュールのみ」であったという。

近代学校制度における教師と生徒の権力関係は、制度の存立に関わる構造的なものであり、それを維持しようとするならば、濱崎の言うように、“祭の機能”を再活性化させることで、フレキシブルに管理することが望まれるだろう。しかし、現代の学校現場に身を置く教師と生徒の内面に一歩立ち入れば、複雑な優劣の基準が用いられていることが想像される。塾や予備校における学習の比重が増したことによる、学校教師の権威の失墜、消費者目線で、よりよい教育＝サービスの提供を求める生徒の意識変化、単純に、教師よりも一回り、二回り若いことからくる生徒の強者性など、教師が生徒に脅かされる要素をふんだんに認めることができる。また、教師同士が相互の優劣を比べる基準も、進学実績につながる教育力や部活動における指導力、学校に適応できない生徒の居場所を作ること等、多様に設定し得るのであり、生徒間の序列もまた同様である。

このように、人間は何らかの基準で、他者よりも優れた存在でありたいと欲望するものであり、多くの人間が共有している基準に照らし、自己を高めていける（いこうとする）者もあれば、それをあきらめ（あるいは自分を変えたくないために）、ありのままの自己を評価し得る基準を自前で捻出す者もあるだろう。そのような欲望を抱く自己を嫌悪し、自

己否定に進む場合でも、“自己否定し得る自己”を優れた者と見なしていることから逃れられない。

優れた存在・行為を追究すること自体は、あらゆる学問を成り立たせる基本姿勢であり、それを放棄することは学問を死滅させることにつながると考えられる。しかし、“他者よりも自分のほうが優れた存在でありたい”という、オートマティックに湧き起こる欲望に対しては、理性の眼を光らせ、冷徹にその動きを観察することが肝要であろう。事物の優劣を判断する基準は、矛盾を孕みつつ無数に存在し得るため、どこまでも優劣にこだわる者は、無数の基準相互の優劣を判断するための、さらなる基準を求めることになる。その際、多くの人間に共有されている基準であるか否かや、その基準に照らして、他ならぬ自己を肯定的に評価し得るか否かをいかに重視することなく、“基準の優劣を判断する基準”を追究できるかが、この問題を学問の俎上にのせるための鍵となるように思われる。（しかし、このような主張自体、一定数の読者に共有してもらえる優れたものだと思えるからこそ主張するのであり、生きている限り、自尊心を捨て去ることはできないことを、十分に自覚しておく必要があるだろう。）

こうした問題に、極めて繊細な感性をもってアプローチし続けていると思われる人物に、鳥取西高新聞部における濱崎の教え子であり、「第1期前期スペース」の主要な書き手の一人であった徳永進がいる。次節では、彼が“書く主体”として自己形成を遂げるプロセスを跡付けてみたい。

第2節 医療と暴力

徳永進の著書に付された著者紹介や、従弟にあたる安藤隆一の情報提供によれば、徳永の略歴は以下の通りである。

- ・1948年、徳永^{つねお}職男、美枝子の三男として、鳥取県八頭郡郡家町こおげに生まれる。
- ・1957年、郡家町から鳥取市内に転居。
- ・鳥取大学付属小学校・中学校、鳥取県立鳥取西高校卒業。
- ・1968年、京都大学医学部入学。FIWC（フレンズ・インターナショナル・ワーク・キャンプ）に参加し、大倭^{おおやまとあじさいむら}紫陽花邑（奈良市大倭町）に建設された、「らい恢復者社会復帰センター 交流の家」を手伝う。
- ・1971年、鳥取県八頭郡八頭町姫路に家を借り、同志とともに「私都村」の建設を試みる。

- ・1974年、京都大学医学部卒業。
- ・京都国立病院、大阪吹田の同和地区診療所を経て、1978年、鳥取赤十字病院の内科医となる。
- ・1982年、『死の中の笑み』（ゆみる出版 1982年2月）が、第4回講談社ノンフィクション賞受賞。
- ・1988年、鳥取市湯所町に、セミナーハウス「こぶし館」を建設。
- ・1992年、独自の信念に基づいて地域医療に取り組む人に贈られる、若月賞の第1回受賞者となる。
- ・2001年、鳥取市行徳に、ホスピスケアのある19床の有床診療所「野の花診療所」を開院。
- ・2002年より、在宅ホスピスを開始。

徳永が京都大学医学部に入学した1968年は、学園闘争のただ中であり、活動家の友達からデモに誘われ、「内ゲバ」についてどう思うかを問われた徳永は、「殴りあったら血もでるし、痛いだろう」と答えたという⁽²⁸⁾。

つまり、革命を叫ぶのは威勢はいいけど、それは理念であって、もっと即物的な「痛み」はその犠牲になってもいいの。その「痛み」への配慮ということが、私の原体験として、その後医者になってからもずっと底流に流れているような気がするんです。(中略)

私の場合は社会のために役に立ちたい、困っている人を助けたい、そのために医者になろうと考えたんです。でもそれは、自分が政治活動にのめりこめない代償という大袈裟かもしれんけど、オルタナティブではあったと思う。(鷲田清一・徳永進『ケアの宛先—臨床医、臨床哲学を学びに行く』雲母書房 2014年6月 63、69～70ページ)

ここで徳永は、自己の心身を痛み、他者に痛みを与えても、政治的な目的(学園闘争においては、学問の自由や大学・学生の自治を守ること)を達成しようとする行為を優れたものと見なす基準に照らし、自身が劣っていることを認めた上で、自他の「即物的な「痛み」」に最大限「配慮」する態度こそ優れているとする基準を打ち立て、後者に基づいて医者になることを選び直している。

暴力を手段とする社会変革を否定し、非暴力的な働きかけによる日常性の再構築に目を向けるようになった徳永は、FIWC 関西委員の一員として、奈良

市大倭町で社会福祉法人を営んでいた共同体・紫陽花邑に入り、「交流の家」を手伝うようになる。

^{むすび}
交流の家はコンクリート造りの二階建て。これはFIWC 関西委員会が建てた、らい回復者社会復帰センターである。交流の家の建設にとりかかったさい、地元の人びとが建設反対を叫んで、押しかけたことがある。そのときFIWCの学生たちは、鶴見俊輔氏が「非暴力精神の非常に見事な運用形態」と絶賛する態度で対応した。すでに積み始めていたブロックを崩して一度退き、そのうえで徹底的な説得活動をおこなったのである。日聖法主と邑人たちは、その運動を守った⁽²⁹⁾。(アサヒグラフ編著『にっぽんコミュニケーション』朝日新聞社 1979年6月 229、232ページ⁽³⁰⁾)

「らい回復者」の受け入れを拒絶する地元住民を、非暴力的な対話を通じて説得することで誕生した「交流の家」での経験は、ふるさと鳥取に、同じく「らい回復者」を迎え入れるための共同体・私都村を建設する取り組みへと徳永を向かわせた。

徳永ら、学園闘争に違和感や行き詰りを感じていた同志たちは、冬は雪深い八頭郡八頭町姫路に、36万円で中二階の古びた農家を買ひ、「私都村」と名付けて共同生活を始めた⁽³¹⁾。「どんなやつでもきていいところとして設定」し、「故郷を追われたらい者が、帰ってくる場」⁽³²⁾ともなることを目指して地元住民に働きかけたが、話し合いは物別れに終わった。

結局、ひとりのらい者も帰ってこなかった。村人のどのひとりにも「わしゃあ 治ったもんならきてもええと思う」といわせることはできなかった。「らい」と「故郷」の形を私都村はまったく変ええなかった。(徳永進「暖かい群を求めて 故郷と癩と私都村」『別冊 経済評論』9号 1972年5月)

「私都村」の活動が徳永に促した自覚には、大きく二つのものがあるように思われる。一つは、医療と暴力の関係についてである。ハンセン病をはじめとする伝染病患者を隔離することで、非感染者への感染を予防し、閉鎖された空間の中で患者の治療を行うことは、(医者が患者とともに隔離空間に身を置いているとしても)伝染病患者への差別を構造として

固定化し、回復者の帰郷を絶望的なものにする。さらに、1930年代から進められた「無癩県運動」と呼ばれる強制的隔離政策によって、地域から患者の姿が消えても、「らいのスジを語り継ぐという拒絶の形はいぜん残りつつけている」⁽³³⁾と徳永が言うように、医学的根拠とは無縁な「らいのスジ(家系—引用者注)」を実体化する語りや、「隔離」という政策および医療行為から流れ出す。徳永が学園闘争の渦中で選び取った、「自他の「即物的な「痛み」」に最大限「配慮」する態度こそ優れている」とする基準に、医療は100%奉仕するものではないという自覚が、後に「患者のことを書く」という営みに徳永を向かわせたように思われる(詳しくは次節以降で述べる)。

もう一つは、一個の人間は、矛盾する優劣の基準を同時に抱くことがあり、往々にしてその欺瞞に無自覚であるということだ。徳永は「暖かい群を求めて 故郷と癩と私都村」(前掲)の中で、長島愛生園を訪れた際に抱いた感懐を、次のように告白している。

患者のひとり、権さんのだだっ広い部屋に泊ったことがある。夜中、権さんが、ぼくの上に乗っかかってきて、ペロペロぼくの体じゅうをなめまわす夢をみた。ぼくは、やめてくれと叫びそうだった。非らい者がらいのことにかかわるのはむずかしい。それは、みずからが拒絶の心を持っているからだし、らいにはなりたくないと考えているからだ。(傍点原文)

徳永はここで、ハンセン病患者およびそれからの回復者よりも、未罹患者のほうが優れているとする基準と、そのような基準を採用する者(ハンセン病患者を差別する者)よりも、採用しない者(差別しない者)のほうが優れているとする基準の双方に、自身が深くとらわれていることを自覚している。そして、定義上、前者は後者に内包されていながら、それを突き破る程に強固なものであることもまた、厳然たる事実なのである⁽³⁴⁾。

自身の内部において基準を淘汰し、選び抜かれた基準を貫くことができない人間が、暴力を孕んだ医療に従事すること——徳永の臨床医としての出発点をそのように仮定した上で、彼が『まちの本スペース』に発表した文章に入っていきたい。

第3節 関係性の不安定化と“自由”

徳永進「《街の友人》看板かつぎの宣伝マン じゅうたあじいさん」(『まちの本スペース』3号 1979年6月)において語り手は、ハンセン病患者とともに故郷の街から姿を消した人々——「少し知能の低く、ぼくの田舎で冗談風に人を侮蔑するときを使う呼び名の持ち主たち、“おしげ”“じゅうたあ”“すがお”“あめいち”“きく”……」⁽³⁵⁾の一人である「じゅうたあ」を、「老人ホーム敬生寮」を訪ねるとともに、街の人々に彼についての聞き取りを行っている。(徳永のエッセイには、多分に虚構が含まれていると考えられるため、筆者・徳永進と語り手を区別する。)

「じゅうたあじいさん」こと「戸田重祐さん」は、明治44年に生まれ、3歳の時に両親と死別、昭和10年頃から看板かつぎの仕事をした。満洲の戦地で弟を亡くし、昭和22年、36歳の年からは、「鳥取市養老院」を寝場所として街を練り歩いた。芝居や映画、大売り出しの店屋の宣伝を一手に担って来た「じゅうたあ」を知らない人はなく、「道ゆく人は「あ、じゅうたあだ、おいじゅうたあ、じゅうたあ」と少しばかにして親しみをこめてこの人を見、この人に声をかけ、この人が看板を背負い街を歩く風景を自分の中に受け入れてきた」という。「じゅうたあ」に石を投げつける子どもたちも含め、街の住人が、「知能が低い」という基準で彼を劣位に位置づけるのに対し、語り手は、彼が時に「ピラをごっそり捨てて長いこと遊んで」、「知能の高い使用人」を欺いていたことを指摘する。さらに、自身の中学校時代のあだ名が「じゅうたあ」であったこと(このことは語り手が、「じゅうたあ」が見下げられていたと類似の基準で、同級生に見下げられていたことを意味する)を告白した上で、「じゅうたあ」から看板かつぎの仕事を奪い、飛行機を使って「インベーダーゲームセンター」の宣伝をする都市の大型資本に、二人で立ち向かうことを夢想する。

湖山の老人ホームから本物のじゅうたあと名誉あるあだ名をいただいたじゅうたあがインベーダーをやっつけるため「街はじゅうたあを奪い返せ」と書いた看板かついで鐘をならして街へと行進すべきではないかと考えたが、じゅうたあじいさんとの最後のトーンを異にする会話には、ついに勝てなかった。

“いかに純粋な「じゅうたあ」であるか”という、誰にも共有されない優劣の基準に基づいた、“「あだなの本尊」とその弟子”による、大資本を相手取ったゲリラ戦の可能性は、「これからは何がしてみたいですか」という弟子の問いかけに対する、「別にありませんなあ。ここのゴミでも焼くです」という「本尊」の返答によって挫かれていく。「あんた日赤病院ですか。看護婦さん、ええですな。(中略)今度、来てもらってください。わしゃ会いたいがよ。頼みました」と言う「じゅうたあじいさん」は、語り手の訪問を、医者による「敬生寮」への「慰問」(傍点原文)としか捉えていなかったことが、作品末尾で判明するのだ。

知能が低い者よりも高い者のほうが優れているという優劣の基準に対し、偽物の「じゅうたあ」よりも「本物のじゅうたあ」のほうが優れているとする基準を仮構する試みは、都市資本の波に抗して、看板かつぎの「じゅうたあじいさん」を街に取り戻すことや、子どもたちが彼に石を投げるのをやめさせることにつながるものではなく、「本物のじゅうたあ」にすら受け入れられることのない、一片のレトリックにすぎないのかもしれない。しかし、医者であり、「じゅうたあ」でもある語り手の語りは、知能の高低を絶対的な基準として受け入れ、疑うことのない人々を不安にし、医者と「じゅうたあ」の位置関係を混乱させるに十分な読後感を与えるものである。

また、徳永進「街角に坐るおシズばあさん」(『まちの本 スペース』11号 1979年5月)には、語り手が勤める病院に入院して来た「おシズさん」の半生が、彼女の言葉を引用しながら綴られている。

「おシズさん」は、明治38年に鳥取に生まれ、18歳の時に大阪に夜逃げ、「トビ職人の飯場」で「飯炊き女」をつとめ、東京に移って20年間、飲み屋で働いた(その間2年程、岩手で捕鯨船の飯炊きも経験した)。親の死をきっかけに帰郷し、女郎屋「天守楼」の「茶運びおばさん」となるが、昭和33年の赤線(売春公認地域)廃止後は、「ヌード劇場の呼び屋のおばさん」として街角に坐るようになる。大学生であった語り手が、帰省の折に「おシズさん」の世話になったのはこの頃のことであり、「先生、ようヌードに来られましたなあ、覚えとりますで」と言われなかったのが幸いだったが、いつのまにかよくこのおばあさん(おシズさん)の話聞くようになった。

「おシズさん」は、語り手を含む、性欲に悩める青少年に、次のように情けをかける。

若い小さいのが、おばちゃん、はいってええかって。ええで見んさいって言ってあげるですが、かわいいです。若い人が10人ぐらいきて、みんなこれだけしかないけどって言って、ええでみんないなくて、それがおもしろかった。

ここにも、若い男性と老齢の女性、医者と「ヌード劇場の呼び屋のおばさん」の力関係を転倒させるしかけが、語り手によって仮構されていることが読み取れる。次第にヌード劇場に対する取り締まりも厳しくなり、「毛一本みせても捕る」ようになると、「そんなら医者をみんな逮捕せえ」と言い、^{なりわい}生業に優劣をつける基準の理不尽さに憤る「おシズさん」は、人間を判断するための彼女なりの基準を、次のような言葉で説明する。

私は女郎をいやしい仕事だとは思いません。金がないことほど辛いことはない。道の真中で金の催促をされるほど悲しいことはないです。人はそんな悲しみがいやで仕事するです。皆好きずきです仕事だから、どんな仕事でも金をためて悲しい目にあわんようにしたらええと思えます。どんな仕事をしとっても人間皆同じです。ええ人はどんな仕事をしとってもええです。どんなえらい仕事をなさってもいけん人はいけません。

自他を比較して、自分のほうが優れていると見なすことで自尊心を保持する仕方とは別に、自他の区別なく、人間の尊厳の危機が露呈する状況として想定し得るものの一つに、「道の真中で金の催促をされる」場面があるように思われる。「道」という公共空間を、自分の好きな方向に歩く自由が蹂躪される事態は、自己の生涯において避けたいと願うものであると同時に、他者が陥る場合も、手を差し伸べることの困難な、思わず目を背けたくなるような“絶対的な悲しさ”を感じさせる。それを避けようとする意志と努力の現れとして、様々な生業が営まれているとすれば、その内容によって人間の価値を量り取ろうとすることは、論理的に意味をなさないはずである。「社会の陽のあたらない所」で働き、そうした他者を多く見て来た「おシズさん」が、生業から独立させた次元で、人が「道」を自由に歩くその足取り、向かう方向、行き合う他者との関わり方、関わらないという選択によって、「ええ人」か「いけん人」

かを判断しようとした姿勢は、自尊心をめぐる回廊に一条の光を差し込むものに思われる。

第4節 “生命の価値”をめぐる

モチーフの連鎖

ここで、『スペース』に掲載された唯一の小説作品である、山中螢児⁽³⁶⁾「連載小説 黒い花火」(『まちな本 スペース』11～12号 1981年8・12月 連載2回で中絶)に目を移してみたい。作中に流れる時間は、1990年代後半の近未来、創立5周年を迎える「国家防衛軍」が中近東に派兵され、それに反対する一部の国民がゲリラ隊を組織すると、国民に対する監視を強化すべく、国防軍内に保安部が設置された。主人公「明男」は、勤務先の小出版社・「現代日本社」の倒産と同時に送られて来た「義勇軍招請状」(無職であったり、長男でない男性が優先的に徴兵される)を無視し、鳥取市を想起させる「砂浜の地方都市」に赴く。そこで気心の知れた仲間たちとともに、「自由の戦士」という反戦組織の活動に身を投じていくことが暗示される。

2018年現在の、国内外の状況に照らした時、山中の先見の明には驚くべきものがあるが、連載2回で中絶したために、「明男」たちの闘いの結末や、ヒロインと思われる「羊子」と「明男」の関係の行方を見届けることはできない。その中で、連載1回目のみ登場する印象的な人物に、「基地の街をあてにした行商のおばさんたち」の一人である「およしさん」がいる。「砂浜の地方都市」に向かう列車の中で、「古ぼけたかっぱう着を身にまとい」、「アルミの箱を腰掛けにして、坐り込んでいる」「およしさん」の姿に、「年老いた母親をかい間見た気」のした「明男」は、「おばあさん、代りましょうか」と声をかけるが、彼女は「一瞬ギラ付く眼の底に、妙に優しい光をたたえて」応えない。

車内のアナウンスが街の駅への到着を告げると、およしさんは急に立ち上ってしまった。立ったと思うと、腰の下のアルミの箱をひょいと持ち上げ、肩にかつぎ上げてしまう。よっこらしょ、などよろけている他のおばさん達を尻目に、よろめきもせずに歩いていく。

2017年12月16日にインタビューを行った際、「山中螢児」こと太田満明は、「およしさん」を反戦ゲリラ組織の連絡係を務める女性として造形したこ

と、そして彼女のモデルは、徳永進「みちばたの風景 トロ箱のおばさん」(『まちな本 スペース』4号 1979年9月)に描かれた女性であることを明かしてくれた。徳永が描いた「トロ箱のおばさん」は、鳥取市の漁港、賀露に嫁ぎ、トロ箱を積み上げた自転車に乗って、20年以上魚の行商を続けた女性である。彼女が運ぶ魚は、道行く人々に「まだ山陰の海が生命を可能にし、自分たちもまだ生き続けられる環境の中にあることを確認」させてくれるものであった。「黒い花火」に戻れば、時代は準戦時下であり、「まだ生き続けられる環境」が脅かされる中で、かつてトロ箱いっぱい「生命」を詰めて届けてくれた「およしさん」＝「およしさん」は、「アルミの箱」に何を詰め替えて運んでいくのか。日々の行商という重労働に耐えながら、戦時下をくぐり抜け、生命に対する感受性を研ぎ澄ましてきた「およしさん」の存在は、戦後生まれの戦争推進派／反戦派の観念的なイデオロギー対立を、日常性の次元に引きずり下ろす役目を担うものであることはたしかであろう。自身の所属する社会がひとたび戦争下となれば、どのような存在・行為を優れたものと認めるかという基準は、(長男や有職者を重んじるという平常時の基準を内包しつつも)様変わりする。「生命」は、その存在自体において価値を認められることはなく、「自他を効率的に殺し得る生命」として機能することが求められ、基準の多様性や、ポジティブに基準を混乱させる試みは圧殺されるだろう。

このように、徳永のエッセイと山中の小説は、各々独立した作品世界を構築しつつも、『まちな本 スペース』という〈場〉を媒介として、平常時／非常時を貫く“生命の価値”をめぐる、モチーフや問題意識の連鎖を読者に垣間見せてくれる。

第5節 物語と祀り下げ

徳永は、6回にわたる『まちな本 スペース』への連載を終えた後も、日赤病院や野の花診療所で出会った患者とのエピソードをもとに、文章を書き続けている。FIWCに参加した際、「言葉より行動」というスローガンがいいと感じ、「それはいまでも自分のなかの指針としてある」⁽³⁷⁾という徳永は、つねに患者のベッドサイドに寄り添うという形でその指針を実践しながらも、なぜ物語するという営みを手離さないのだろうか。

2017年10月10日、安藤隆一とともにインタビューを行った際、徳永は、当事者である患者にエピソード

ードの公開を許可してもらえる確率は、7割であると語っていた。それは、医者—患者という権力関係ゆえの勝率であると同時に、徳永が患者とのエピソードを言語化し、その公表をめぐる本人に伺いを立てることは、患者に医者を批判・拒絶する材料・機会を差し出すことにもなっていることがわかる（徳永は「お目こぼし」を乞うという言葉を使用した）。差し出された患者は、物語の主人公の資格でもって、その内容が事実を反映しているか、あるいは逆に、十分な虚構化が施されているか、さらには読み物として客観的な価値があるのか否かといった自分なりの基準に基づき、主治医の書き物の優劣を判断する存在として主体化される。

第1節で紹介した濱崎の記事「胴上げと幟ねり」では、柳田民俗学が明らかにした〈ハレ〉（非日常）と〈ケ〉（日常）の文化とも読み替えられるものの再興の必要性が提起されていたが、波平恵美子が第三項として位置付けようとした〈ケガレ〉の概念が、ここでは重要となってくるように思われる⁽³⁸⁾。かつて出産や病、死といった〈ケガレ〉に直接接触する営みとして認識されていた医療は、明治以降、政府の主導した西洋医学の導入を経て権威化された。徳永は、〈ケガレ〉の領域から祀り上げられた医者という社会的ポジションを、守秘義務を半ば放棄するという危険を犯すことで、前近代的な位相に祀り下げようとしているかのように見える。徳永が、近代的な医療行為を逸脱した言語活動を続けるのは、あえて自らを祀り下げ得る者を優れた存在と見なす自己満足のためなどではなく、医者と患者の関係性を不安定化し、〈ケガレ〉の一部として振る舞うことが、患者の心身の治癒や遺族の慰安を促すことを信じるがゆえなのだろう。

以上のような問題意識に基づいて公表される、徳永が営む広義の医療行為の可否は、多様な基準の群れを彷徨いながら生きる、一人一人の読者の判断に委ねられている。（岡村知子）

おわりに

1978年に創刊された『まちの本 スペース』が、「権威主義」や「大資本」へのアンチテーゼを表明した雑誌と目されていた⁽³⁹⁾ことからわかるように、敗戦後の民主化のただ中に生まれ育った『スペース』の担い手たちは、“外なる権威”に対する違和感や嫌悪感に駆り立てられるかのように、政治や文化の領域で“自由”を求める闘いを挑んでいったよ

うに思われる。多くの同調者や傍観者を置き去りにし、敗北した学園闘争の経験から、『スペース』は「だれでも参加できる新スタイルの本」⁽⁴⁰⁾を目指した。執筆・取材・編集・広告取りといった、どのような関わり方をする者も対等なメンバーの一員として認識されていたことは、200名を越える参加者の職業の多様さにも現れている。

しかし、例えば「日赤病院の医者」と「農民」、「化粧品会社のチャームガール」⁽⁴¹⁾が、同等の資格で『スペース』に集うことに意味があるのは、実社会における厳然たる職業格差を背景としてのことだろう。ここに、第2章で徳永進の記事に注目しながら論じた、“内なる権威”との闘いの問題が胚胎する。職業によって自他の優劣を測り取ろうとする意識と、『スペース』という場において、それを無化していこうとするポーズとの間には、越え難い齟齬がある。さらに、どのような職業に就こうと、他者との関係において労働を切り売りし、賃金に変えていくほか道がない以上、権威主義・資本主義社会に与する存在であることから逃れられず、そのような現実と、『スペース』における反権威主義・反資本主義のポーズの間でも、参加者は引き裂かれていたものと考えられる。

とは言え『スペース』は、そうした“引き裂かれ”を通して、経済が政治に代わって人々の関心事となった時代に、「地方」「共同体」「文化」を足場とし、資本主義経済に埋没して生きることにに対する危機感を表明し得た、稀有なメディアであったと考えられる。（岡村知子）

注

- (1) 田村紀雄『タウン誌入門』（大和書房 1979年4月 9ページ）
- (2) 田村紀雄『地域メディア時代—コミュニティ情報をどうとらえるか』（ダイヤモンド社 1979年5月 146ページ）
- (3) 注(2)に同じ（145ページ）。
- (4) 注(2)に同じ（141ページ）。
- (5) 浜崎洋三「新聞部と不羈の精神」（鳥取西高資料係編『鳥城』12号 1979年3月 50ページ）
- (6) 注(5)に同じ（50～51ページ）。
- (7) 安藤隆一「地元文化へ グリラ出撃」（朝日新聞鳥取支局編『私の交遊抄（中）』スペース企画 1989年10月 378ページ）
- (8) 『まちの本 スペース』2号 1979年 ※刊行月不明

- 52 ページ)
- (9) 『まちの本 スペース』(20号 1985年7月 44 ページ)
- (10) 『まちの本 スペース』(21号 1985年10月 40 ページ)
- (11) 注(2)に同じ(143 ページ)。
- (12) 谷根千工房『ベスト・オブ・谷根千 町のアーカイブ』(亜紀書房 2009年2月 348 ページ)
- (13) 安藤隆一「内発的発展を中心とした地域活性化政策における「ネットワーク、パートナーシップ」の重要性」(『平成20年度 研究紀要』しんきん南信州地域研究所 2009年5月 14 ページ)
- 本稿で論述されている、鳥取県の地域活性化運動である「ジゲおこし」については、筆者が同論文に詳しく分析しており、参照のこと。
- (14) 『ジゲおこし風土記 PART II 「ジゲおこし」から「誇り」へ』(鳥取県ジゲおこし団体連絡協議会 1997年3月 32 ページ)
- (15) 『まちの本 スペース』(11号 1981年8月 48 ページ)
- (16) 団塊の世代とは、日本において、第一次ベビーブームが起きた時期(1947～1949年)に生まれた世代を指す。この名前の由来は、堺屋太一の「団塊の世代」という小説(1975～1976、月刊『現代』掲載)による。
- (17) 文中、「日大や東大の紛争」とあり、マスメディア等は客観的な表現として「大学紛争」という用語を使用しているが、筆者は在学中の大学の運動に主体的に参加しており、その意味で以下は「学園闘争」と表記する。
- (18) 鷺田清一・徳永進『ケアの宛先—臨床医、臨床哲学を学びに行く』(雲母書房 2014年6月 69～70 ページ)
- (19) 浜崎洋三「座談会「本校美術教育の成果」」(鳥取西高資料係編『鳥城』第一七号 1984年3月 42 ページ)
- (20) 小熊英二『1968(下) 叛乱の終焉とその遺産』(新曜社 2009年7月 783～784 ページ)
- (21) 注(20)に同じ(78 ページ)。
- (22) 注(18)に同じ(67 ページ)。
- (23) 徳永進「暖かい群を求めて 故郷と瀬と私都村」(『別冊 経済評論』9号 1972年5月 194 ページ)
- (24) 注(23)に同じ(194 ページ)。
- (25) 徳永美枝子『私と私都村』(私家版 1978年 12～13 ページ)
- (26) 『伝えたいこと 濱崎洋三著作集』(定有堂書店

- 1998年2月)所収の「年譜」によれば、濱崎は、1936年、鳥取市川端に生まれ、55年、鳥取西高校を卒業し京都大学文学部に入学、59年に史学科(国史専攻)を卒業した。卒業後帰郷し、60年に鳥取西高校教諭となり、66年には、顧問を担当していた新聞部が、西部日本高校新聞コンクールで準優勝を獲得した。69年より教壇を離れ、鳥取県総務部広報文書課県史編纂室主任、鳥取藩史刊行会監修委員、新修鳥取市史編纂委員を歴任し、82年、鳥取西高校に復帰。90年からは、鳥取県立公文書館に勤務し、翌年公文書館館長に、93年には鳥取県立図書館館長に就任した。96年、肝臓癌で死去(享年60歳)。日本の近世期を専門とする歴史学者としての側面と、高等学校の生徒や地域住民と向き合う教育者としての側面を兼ね備えた人物であった。
- (27) ジョルジュ・バランディエ『舞台の上の権力』(ちくま学芸文庫 2000年7月 124 ページ)
- (28) 鷺田清一・徳永進『ケアの宛先—臨床医、臨床哲学を学びに行く』(雲母書房 2014年6月 63 ページ)
- (29) 「交流の家」の建設・運営の背景や実態、それに対する鶴見俊輔の評価については、木村聖哉・鶴見俊輔『「むすびの家」物語 ワークキャンプに賭けた青春群像』(岩波書店 1997年11月)参照。
- (30) 初出は、「にっぽんユートピア」(『アサヒグラフ』1978年1～6月)。
- (31) 徳永美枝子『私と私都村』(私家版 1978年)参照。当時、鳥取市内にあった徳永の実家は、「私都村」に向かう若者たちの中継地点として機能しており、母・美枝子は食事や寝床の準備に追われる中で、彼らとの交流を深めていった。安藤隆一によれば、2018年現在、「私都村」の拠点であった建物は朽ち果て、そこに集った人々は全国に散っていったが、その一部は“精神の共同体”としての交流を継続させているという。
- (32) 徳永進「暖かい群を求めて 故郷と瀬と私都村」(『別冊 経済評論』9号 1972年5月)
- (33) 注(32)に同じ。
- (34) 徳永は、主として1980年に、群馬県草津楽泉園、静岡県駿河療養所、岡山県長島愛生園、岡山県邑久光明園、熊本県菊池恵楓園に暮らす鳥取出身の方々40名に聞き取りを行い、その記録を『隔離 らいを病んだ故郷の人たち』(ゆみる出版 1982年12月)として刊行した。徳永は「序」の中で、「聞くことのできた話」は「らい者の身に刻まれたできごと全体の、一部分にすぎない」ことを強調した上で、「た

とえ部分であっても、今生きているらい者によって語られた言葉は、らいを病まずに生きている人たちに伝えられるべき」であり、「少なくとも彼らの話すところは、隔離させてはならない」と記している。

(35) 注 (32) に同じ。

(36) 「山中螢児」のペンネームで、『まちの本 スペース』や同人誌『断層』に小説を発表した太田満明は、1951年、鳥取市国府町拾石に生まれ、70年に鳥取東高校を卒業、名古屋市の大学に進学するが、同年、明治公園で開催された国際反戦デーの集会で負傷。大学を中退し、東京の大学に入り直す。76年、卒業と同時に帰郷し、山陰中央新報社に入社。2010年からは論説委員を務め、2017年に退職した。徳永や安藤よりも3歳若い太田は、学園闘争末期の過激分子に共鳴しながらも、逮捕を免れたために新聞社に就職できた負い目から、特に『断層』に発表した、戦争をテーマとする作品群（「ボクラ、「戦争」は知らない」〈『断層』7号 1980年9月〉、「戦争ごっこ」〈『断層』8号 1981年※刊行月不明〉、「…そして、戦争は始まった」〈『断層』9号 1981年12月〉）においては、自己を反映させた、反戦闘争に没入し切れない、矛盾・葛藤を抱えた人物（前者二作品では、ペンネームと同じ「螢児」という名が与えられている）を主人公に設定している。

(37) 注 (28) に同じ (68 ページ)。

(38) 波平恵美子『民俗宗教シリーズ ケガレ』（東京堂出版 1985年9月）参照。

(39) 「だれでも編集に参加できる新スタイルの本「まちの本・スペース」 ヤングが既成の文化に挑戦」（『日本海新聞』1978年12月13日）

(40) 注 (39) に同じ。

(41) 「編集室から」（『まちの本 スペース』5号 1979年12月）

※引用文の傍点は、注記のない限り引用者による。

資料編

関連年表

- 1978年10月 『まちの本 スペース』発刊準備の会合、開始。
12月 『まちの本 スペース』0号発行。
1984年5月 『まちの本 スペース』18号 5周年記念号、通常の2倍以上の100ページ。
1985年10月 『タウン情報誌 まちの本 スペー

ス』21号と「タウン情報誌」という名称を付加。

1988年12月 「スペース編集室」を「スペース企画」と改称し、『スペース』編集部門（名称は「スペース編集室」を使用）に加え、単行本出版部門を設立。

1989年2月 「スペース企画」から単行本第1号として『紙原四郎きりえ画文集』を出版。

3月 食べ歩きガイド『カルチャー食』を出版。

4月 『とっとり・くらよし タウン情報誌 まちの本 スペース』34号と改称し、コロ編集室（倉吉地区）と共同で編集。

6月 朝日新聞鳥取支局編『私の交遊抄（上）』を出版。（中）は同年10月、（下）は1990年7月出版。

9月 『月刊タウン情報誌 鳥取・倉吉・米子 スペース』10月号（通巻37号）から発行元をR2 エージェンシー（代表 山本利絵）に変更（企画・編集はスペース編集室）。専従スタッフを置き、念願の月刊化を実現。

1990年4月 『月刊タウン情報誌 鳥取・倉吉・米子 スペース』4月号（通巻43号）から発行元をスペース企画に変更。

8月 『スペース』メンバーが中心となって編集した『とっとり大好き』（発行 鳥取県企画部文化国際課 編集 とっとり大好き刊行委員会）が1万部発行される。

1992年1月 「スペース企画」を法人化し、「株式会社 スペース企画」を設立。

9月 『ジゲおこし情報誌 因伯人』（発行 鳥取県企画部企画課）の編集・取材を「株式会社 スペース企画」が受託。

1997年12月 『タウン情報 スペース』1月号（通巻136号）をもって終刊。

奥付、編集後記等関係資料

『スペース』第1期である0号から35号までについて、発行年月（発行年は、西暦・年号それぞれ

の記載があるが、西暦に統一)、全ページ数、特集(特集ページを設けている号)、発行人、発行所、編集人、編集長、編集者、編集協力者、印刷所等を記載した。また、「原稿のご依頼」、「編集室」、「編集室から」、「編集後記」、「視点」から、編集方針や『スペース』のその時の状況を表しているものを抜粋し記載した。

なお、発行年については奥付に記載のない号もあるが、諸資料から確定し、記載した。また、発行月の記載のない場合は、その号の発行月を記載していない。ただし、0号については、9号の「編集室から」に12月8日とあり、本稿では12月とした。

0号(1978年12月)全48ページ

- ・地酒特集
 - ・編集人 美沢丈 編集 「スペース」編集室 鳥取市江崎町61
 - ・発行人 中尾行雄
 - ・印刷 今井書店印刷工場
- 「私たちは、新しいスタイルのまちの本を刊行しようと、日夜奔走しています。／あなたの情熱を雑誌の企画、取材編集、紙面構成、広告依頼、販売、オーナーなどすべての分野に注いで頂き、まちの本をつくらうと思っています。」(「原稿のご依頼」48ページ)

1号(1979年)全52ページ

- ・特集 とっとり駅前大解剖
- ・編集 スペース編集室 鳥取市江崎町61

2号(1979年)全52ページ

- ・編集 スペース編集室 喫茶デュフィ内(鳥取市末広温泉町454)
- ・発行 まちの本をつくる会 鳥取市江崎町61 発行人 中尾行雄
- ・印刷 今井書店印刷工場

「この本は自主的に参加したさまざまな人たち(女性も多数)によって支えられ作られています。専属のスタッフ(この本作りを職業としている人)は一人もなく、執筆、取材、編集、広告取りなど全て、自分の仕事の終わった後「手弁当」でやっています。」

「とっとりにはいわゆるタウン誌が育ちにくいとよく言われます。私たちは「商業ベースにのった本」ではなく「参加の本」ならどうかという考えから、敢えて不備の創刊0号、1号と刊行しました。そして各方面からの批判やアドバイスを受け、今、改めてさらに充実したまちの本にしようと思心しています。」

「さらにいろいろな人が取材活動をしていますが、この本の中の紹介記事は掲載料を一切頂いておりません。これは情報を受ける人達の立場に立って、出来るだけ多くの情報を伝えるためです。(広告代をもらったものだけ記事を載せるということは絶対ありません)」(「スペース編集室」52ページ)

3号(1979年)全56ページ

- ・特集 地方文化の核となるもの 公共図書館
- ・編集 スペース編集室 喫茶デュフィ内(鳥取市末広温泉町454)
- ・発行 まちの本をつくる会 鳥取市江崎町61 発行人 中尾行雄
- ・印刷 今井書店印刷工場

「しかし一番驚いたのは、同じ世代のT君が、この本と出会って感化され、自分が進んでいる道に疑問を抱き、仕事もやめて、上京したことです。東京からの便りには『やっと自分の道を見つけました。(略)皆んながんばって下さい。いつか本に投稿もしたいと思っています。』」(「スペース編集室」56ページ)

4号(1979年)全52ページ

- ・特集 美術の秋
- ・編集 スペース編集室 連絡夜間(鳥取市江崎町61) 昼間 喫茶デュフィ内(鳥取市末広温泉町454)
- ・発行 まちの本をつくる会 発行人 中尾行雄
- ・印刷・製本 今井書店印刷工場

「何か書いてスペースに載せてもらおうと意気込んでみてもいつも挫折してしまう。才能のなさをつくづく感じ、もう二度と書けまいと決心する。でもスペースを離れるのは寂しくて、いらなくなったコーヒークップを寄付したり、雑巾を縫って届けたり、私にはこういう役の方が似合っていると思いつつ又でしゃばってこんなものを書いている。編集室のみなさん、青い海を横目で見ながら暑い夏本当にご苦労様。」(「スペース編集室」52ページ)

5号(1979年12月)全42ページ

- ・特集 音楽
- ・編集 スペース編集室 連絡夜間(鳥取市江崎町61) 昼間 喫茶デュフィ内(鳥取市末広温泉町454)
- ・発行 まちの本をつくる会 発行人 中尾行雄
- ・印刷・製本 今井書店印刷工場

「しかし何よりも良かったと思っているのは「人との出会い」である。発起人はわずか4人であったがこの1年間に何らかの形でこの本に参加してくれたのは、ゆうに200人を越える。書店の店員、デパートに勤める人、公務員、新聞記者、大学教授、NHK

アナウンサー、喫茶店のママ、カバン屋の店長、日赤病院の医者、農民、教師、ディスコの経営者、スナックのマスター、看護婦、化粧品会社のチャームガール、教会の牧師、写真屋さん、レコード店経営者、画材屋さん、建築家それにギャラリー経営者など、ありとあらゆる職業の人達が参加してくれた。もっともこの人達が全員一同に会した事はない。仕事の時間帯が違うからだ。私達の狙いの1つである「参加の雑誌」はこの1年ですっかり定着したと思われる。何故こんなに沢山の人々に参加してもらえたのか。その1つの大きな理由としては「編集長不在」の雑誌だからとも言える。(中略)とにかくありとあらゆるものを「取り入れ」あらゆるものから「学ぶ」私達の姿勢からと自負している。しかしこの雑多な、多様なものを取り入れるという余裕と裏はらに「編集長不在」ではなく「編集不在」という指摘を受けるところである。」「(編集室から」42 ページ)

6号(1980年3月)全50ページ

- ・特集 80年代とっとり
- ・編集 スペース編集室 鳥取市江崎町 61
- 発行人 中尾行雄
- ・印刷・製本 今井書店印刷工場

「とにかくお上のご威光を借りた権威の文化じゃなく、ほんとうに各々が納得した『手作り』のほんものでなくてはダメだ」／特に中世以来の「城下町主義」といったものが、今に生きている。何かやろうと思えば、すぐ「お上」＝「行政」にすがろうとする。また「お上」も、すがって来るものには援助を惜しまない。／この「城下町主義」に対して、もう一つの敵「都会ものまね主義」が新装なった鳥取駅からやって来る。やたらと外側を都会的に仕上げる。ビルさえたてば、値段を高くすればハイカラな時代について行けると、錯覚している。」「(編集室から」48 ページ)

7号(1989年4月)全48ページ

- ・特集 砂丘再考
- ・編集 スペース編集室 鳥取市江崎町 61
- 発行人 中尾行雄
- ・印刷・製本 今井書店印刷工場

「毎週木曜日の午後6時から8時まで、鳥取駅南の県立社会教育福祉会館(新日本海新聞社のそば)で編集会議を開いています。」「(編集後記に代えて」48 ページ)

8号(1980年7月)全68ページ

- ・特集 鳥取ナイトガイドマップ／和紙の里を訪ねて

- ・編集 スペース編集室 鳥取市江崎町 61 発行人 中尾行雄

- ・印刷・製本 今井書店印刷工場

「しかし、「雑誌作り」の真の原動力となっているのは、N君やT君の様な「スペース中毒」とでも言うべき人達である。一円の給料も、原稿料も出ない、いや経費さえ自前なのに、黙々と「本作り」をやるエネルギー、それはどこから来るのであろうか。／それは、「鳥取の街の生活があまり面白くないゾ」「なんとか人間らしい文化的な生活をしてみたい」という思いではないだろうか。」「(編集室から」68 ページ)

9号(1980年11月)全48ページ

- ・特集 ディスカバー地酒(永久保存版)／旅一その大いなるロマン

- ・編集 スペース編集室 鳥取市戎町 456 発行人 中尾行雄

- ・印刷・製本 今井書店印刷工場

「単に「スペースのメンバーである事」には何の意味もない。スペースを創る事に意味があるのだ。今までは幅の広さを求めてきたが、これからは底の深さを追究したいと思っている。」「(編集室から」48 ページ)

10号(1981年3月)全44ページ

- ・特集 日本海

- ・編集 スペース編集室 鳥取市戎町 456 発行人 中尾行雄

- ・印刷・製本 今井書店印刷工場

「マス・コミでもないし、ミニ・コミでもないし、まあいわばミディー・コミとでも言うべきものかな。」マス・コミではないが、人口10万のとっとりで、コンスタントに2千部づつ10号まで出したのだからミニ・コミとも言えないと思う。ミニ・コミはもっとテーマと対称を絞り深く切り込んでいくものだと思っている。運動としては70年代型であって、広く大衆性を持って現実に力を持っていく事がやはり80年代のテーマだと思っている。まあいずれにしても、マス・コミ、ミニ・コミあるいは我々のミディー・コミともそれぞれの特性を生かしてうまく守備範囲を調整しながら協力、共存しなくてはと思っている。」「(編集室から」42 ページ)

11号(1981年8月)全48ページ

- ・特集 ライフスタイルを見直そう！！

・編集 スペース編集室 鳥取市戎町 456 発行人
中尾行雄

・印刷 谷岡印刷 鳥取市元町 126

「スペース執筆陣を中心に月1回毎月1日の日に例会をもっている。スペースとは別組織とし、「セミナー91」と名付けた。1991年まで少なくとも10年間は続けたいと思っている。何回かまとまれば、内容をスペース誌上に発表しようと思っている。乞うご期待！」

「このセミナーの中でH先生が、「キミ達は、若さ由のユニークさだけでもっている。これから真に勉強して実力をつけなくては…」と言ったコトバが心に深く残っている。この街鳥取では少し目立った活動をすると、すぐにマス・コミにちやほやされ、力もないのに実力がある様な錯覚に陥る事が多いからである。私たちの街創りのための提言や行動も「ユニークさ」だけではダメであって、真に力あるものでないといけないと思っている。／しかし、逆に旧体制の批判を恐れない若々しい、新しい動きがもっともこの鳥取で起こる事を期待しているし、そういう動きの「つなぎ役」をこのスペースは果たしたいと思っている。」(「編集室から」48ページ)

12号(1981年)全36ページ

・特集 活字中毒者マニュアル

・編集 スペース編集室 鳥取市江崎町 61

「「パリのポンピドゥー・センターみたいなものを作らんといかん」と田村氏は言う。(中略)／法律によって近代建築の全く存在しないパリ旧市内に、こう然と姿を現す石油コンビナートの様な建物。中は、美術館、フィルムライブラリー、図書館、広場、わけのわからぬ展示。若者たちがウロ・ウロと屯している。渾然一体とした文化センターである。誰が管理している様でもない。広場では大道芸人が音楽や踊りをやっている。そして閉館は、夜十時頃だった様に思う。／日本にも例があるという、ユニークな図書館活動で有名な東村山市である。ここの文化センターは、市民運動によって作られたという。この文化センターもパリのポンピドゥーと同様の機能を有しているし、注目すべき事は印刷の機能もあるという事である。誰でも手作りで、印刷物を作る事が出来る。私はこれが地方出版の原点だと思っている。(中略)／(「スペース」も、もっと主張を出せという読者の意見が強いので、まず手始めとして社説に当る「視点」のページを作ってみました。)(美沢丈「視点」36ページ)

13号(1982年8月)全32ページ

・特集 渴殺 鳥取城「なぜ・いま吉川経家なのか」

・編集長 石井昭 編集者 佐々木晴行、

佐々木千恵子、杉村真佐子、谷口健二、古田江利子、山本栄一、米沢勇

・発行人 安藤隆一 発行所 スペース編集室 鳥取市江崎町 61

・印刷 谷岡印刷 鳥取市元町 126

「自分たちの住んでいるこの街をなんとかしたい。」という気持からこのスペースを始めた。まだ3年半ほどしか経っていないのに編集部員の精神的老令化が目だつ。結婚によるマイホーム主義への逃避。鳥取にUターンして何かやらねばという気持で数年のうちは頑張るのだけれども力尽きて、マイホーム主義へ埋没するというケースが多いのではないだろうか。」

「今、鳥取で活躍している人に聞きたい。「キミは田舎文化人になってはいないだろうか。」「キミは、小さなこの街で権威の鎧を着て生きてはいないだろうか」他からゆさぶりをかけられる事の少ないこの街では、自分で反省するしかない。」(「編集室から」32ページ)

14号(1982年11月)全44ページ

・特集 食べる

・編集長 杉村真佐子 編集 漆原広実、

古田江利子、山本栄一、福田昌人、野田恵、佐々木千恵子、浜田栄、小林千代美、谷口健二、石井昭

・発行人 安藤隆一 発行所 スペース編集室 鳥取市江崎町 61

・印刷 谷岡印刷 鳥取市元町 126

「「渴殺・鳥取城」上演運動は少なくとも興行的には成功であった。演劇運動、文化運動、そして市民運動といろんな人々がいろんな試みに挑戦した。(中略)／外からは、順風満帆に見えるこの「運動」も、実は初めから二つの流れが対立していた。前号の「事務局長日記」にも書いたが、一つは「総合芸術としての立派な芝居をしたい。」という考えでありもう一つは「市民参加でやるのだからみんなで楽しくやればいい。」という二つの流れである。(中略)／むしろ私は、この「運動」を通してこういった「ぶつかり合い」がまだまだ不足であった様に反省している。運動を分裂させないため、私個人としては妥協の連続であった。／仲間を沢山作って楽しくやる事と、そのやる事そのものに対して、遠慮ない論争こそが、

文化を発展させて来たと思っている。「論争すべきは、論争し、仲よく酒を飲む時は飲む。」この姿勢が鳥取にはなかった様思う。」(美沢丈「視点」44 ページ)
15号(1983年3月)全52ページ (奥付には、昭和57年(つまり、1982年)とあるが、前後の号から、明らかに誤りであり、1983年に修正した。)

・編集長 古田江利子 編集 山本栄一、岡田薫、浜田栄、牧田美恵子、漆原広実、佐々木千恵子、佐々木満也、佐々木正之、寺谷光浩、武田恵、大村裕子、竹内ひとみ、杉村真佐子、石井昭、松村豊子、上村陽子

・発行人 安藤隆一 発行所 スペース編集室 鳥取市江崎町 61

・印刷 谷岡印刷 鳥取市元町 126

「徳永氏は処女作『死の中の笑み』で見せなかった医療そのものに対する疑問、問題意識を、ハンセン氏病(らい病)患者との周到なまでの聞き書きで綴られた第二作『隔離』(ゆるみ出版)で見せる。一方方巾市(実一引用者注)氏は本人の意志というより、市民グループ等周囲の人たちの要請でいわばかつぎ出された革新候補だったが、保守独走の確実な中で敢えて敗戦覚悟の出馬となった。／私は二人の中に「やらねばならぬ」という使命感にも似たファイティングポーズを見る。そして二人の華やかさの裏に、人には知られないひたむきで地道な努力を見逃すわけにはいかない。」(石井昭「視点」52 ページ)

16号(1983年7月)全44ページ

・特集 「夢・ロマン」

・編集長 寺谷光浩 編集 勝原尚美、古田江利子、岡田薫、武田恵、大村裕子、竹内ひとみ、杉村真佐子、浜田栄、漆原広実、多田博司、安藤隆一、石井昭

・発行所 スペース編集室 鳥取市江崎町 61

・印刷 谷岡印刷 鳥取市元町 126

「地域運動や文化的な活動を続けている人だけでなく、単に職業としてその現場に取り組んでいる人たちでさえ、流行ことば「ほとんど病気」に近い状態なのだ。(中略)／中国縦貫道が全線貫通した。わが鳥取は京阪神と九州を結ぶ幹線道路からはずれ、以前にもましてローカル色を強いられる。(中略)／この春、北海道に革新系知事を誕生させた「勝手連」などという現代の社会風潮にマッチしたゲリラの運動は、自民党内にその研究の会を作らせるほど威力を見せた。また町立パッハホールを造った宮城県中新田町など全国各地で新しい健全な官民一体となっ

た「まちづくり文化行政」も興りつつある。」(石井昭「視点」44 ページ)

17号(1983年10月)全36ページ

・特集 今我々にとって祭りはあるか?

・編集長 安藤隆一 編集 勝原尚美、古田江利子、竹内ひとみ、浜田栄、石本千歳、小田早苗、杉村真佐子、寺谷光浩、多田博司、石井昭

・発行所 スペース編集室 鳥取市江崎町 61

・印刷 谷岡印刷 鳥取市元町 126

「五年前の丁度この頃のことだったろうか。高校を出て以来会ったことのなかった一人の旧友が私の職場を訪れた。当時の私は、都会での十年間の生活を終えて鳥取にUターンしたところで、毎日さほどする事もなく酒ばかり飲んで暮していた。／「鳥取の街は沈滞してるなあ。」「ほんとに面白い事のない街だなあ。」「何か面白い事をやってみようや」意見は全く一致した。何から始めようかと考えた末、「ぼく達の街には、タウン誌がない」という事に気が付いて、それを創ってみようという事になった。しかし、本業としてではなく、生活の方は別の方法でちゃんとメシを食ってタウン誌作りは金もうけではなく、この街を面白くする一つの手段として出発しようということになった。」(安藤隆一「視点」36 ページ)

18号(1984年5月)全100ページ

・編集 石井昭、寺谷光浩、安藤隆一、石本千歳、沢田保洋、竹内ひとみ、古田江利子、東田和佳子

・発行所 スペース編集室 鳥取市江崎町 61

・印刷 谷岡印刷 鳥取市元町 126

「文化人気取りの人たちの同人誌」とか「もっと情報を多く載せないと買う気がしない」などとあらゆる批判を受けながら、試行錯誤の五年間、『専従を一人も置かない奇跡の編集スタッフ』という評価もあったが、ともかくこの『まちの本スペース』も丸五年を経て通巻十九号目の発行に至った。(中略)／有料の東松照明写真展の成功。加藤登紀子アンコールコンサート。地方から全国に向け図書を架け橋として出版が続く『紙魚』。ユニークな文化拠点として定着したアゴラとっとり(富士書店四階)。親子映画『ピーターラビットとなかまたち』の上映成功。そして七月に予定されている「よろずのみの市」などさまざまな活動、運動がされているが、まだまだ限られた範囲にしか展開されていない。」(石井昭「視点」95 ページ)

19号(1984年12月)全32ページ

・特集 鳥取文化を斬る
 ・編集長 安藤隆一 編集 石井昭、寺谷光浩、
 沢田保洋、津原孝則、竹内ひとみ、前田美雪、
 森下真由美、木下尚子
 ・発行所 スペース編集室 鳥取市江崎町 61
 ・印刷 谷岡印刷 鳥取市元町 126
20号(1985年7月)全44ページ
 ・編集長 安藤隆一 編集 石井昭、寺谷光浩、
 桐島美寿穂、田中淳恵、沢田保洋、津原孝則、
 河崎倫子、寺町富貴子、尾崎真美
 ・発行所 スペース編集室 鳥取市江崎町 61
 ・写植・版下 創英 印刷 今井書店印刷工場
 「最初は隔月刊であったがその後は、季刊となり、
 さらに年2刊最近はその年2刊も危い状態となっ
 ている。創刊0号から参画しているメンバーは私とI
 君だけとなってしまった。／創刊以来7年、常に「鳥
 取に新風を！」という自負が生き残り、もはや終刊
 の予感のみが私達の周りを漂っている。／あの頃青
 年であった私も30代の半ばを過ぎ、家庭や本業に追
 いまわれ、とても「スペース」どころではなくな
 って来た。(中略)「スペース」を出し続けるという
 事は何なのか。常に「声なき声」のメディアを確保
 する事である。勇気を持って「国体なんか負ければ
 いい。」いや、むしろ「負ける事」からしか、新しい
 「鳥取の文化」は始まらないと主張する場を確保す
 る事。／ただ、今言える事はこの「スペース」の発
 行方法・サークル的・手弁当による方法には限界が
 来ている事である。一部のメンバーのムリの上に立
 っていた労力を少しずつプロ的なものに切り換えな
 なくてはならないと思っている。」(安藤隆一「編集室
 から」44ページ)

21号(1985年10月)全40ページ

・編集 寺谷光浩、津原孝則、田中淳恵、浅尾美佳、
 石河和彦、河崎倫子、寺町富貴子、桐島美寿穂、
 沢田保洋
 ・発行人 安藤隆一 発行所 スペース編集室 鳥
 取市江崎町 61
 ・写植・版下 創英 印刷・製本 今井書店印刷工
 場

「今号からタウン情報誌としてイメージを一新。若
 手の編集部員からの激しい突き上げによるもの。こ
 れからは、若い発想と力に期待。老兵は消えゆく
 のみ。(隆)」(「編集後記」40ページ)

22号(1986年2月)全40ページ

・特集 100人に聞きました もしもあなたが……

・編集長 桐島美寿穂 副編集長 沢田保洋
 編集 津原孝則、河崎倫子、田中淳恵、寺町富貴子、
 岡田勝博、石河和彦、尾崎真美、浅尾美佳、
 久野通子、桜谷浩章、西墻直実、森田昌子、
 上田典子、浜本基代枝
 ・発行人 安藤隆一 発行所 スペース編集室 鳥
 取市江崎町 61
 ・写植・版下 創英 印刷・製本 鳥取プリント
 「単なる情報誌でなく、この雑誌を通して地域に根
 ざした街づくりを目標としています。小なりといえ
 ども街の声を代表するオピニオン誌としての方向性
 を模索中。当編集室から給料をもらっている人は、
 発行人も含めて1人もいません。全員手弁当です。
 苦しみながら、一号一号を発行し続けていくことが、
 地域で生きる証であり、地域(鳥取)への私たちの
 熱いメッセージなのです。(隆)」(「編集後記」40ペ
 ージ)

23号(1986年4月)全32ページ

・特集 THE 結婚
 ・編集長 沢田保洋 編集 津原孝則、河崎倫子、
 田中淳恵、寺町富貴子、岡田勝博、石河和彦、
 尾崎真美、浅尾美佳、久野通子、桜谷浩章、
 西墻直実、森田昌子、上田典子、浜本基代枝、
 桐島美寿穂、村上純子
 ・発行人 安藤隆一 発行所 スペース編集室 鳥
 取市江崎町 61

・写植・版下 創英 印刷・製本 鳥取プリント
 「スペースも今年で8年目に入っている。創刊号以
 来のメンバーは私だけとなってしまった。編集部の
 平均年齢も若返り30代が18人中3人アトは20代
 である。実年の読者諸氏も「内容がない」なんて言
 わず若者を暖かく見守ってやってほしい。(隆)」(「編
 集後記」32ページ)

24号(1986年7月)全40ページ

・特集 スポーツあらかると
 ・編集長 石河和彦 編集 津原孝則、河崎倫子、
 田中淳恵、寺町富貴子、岡田勝博、沢田保洋、
 尾崎真美、浅尾美佳、久野通子、桜谷浩章、
 西墻直実、森田昌子、上田典子、滝口美寿穂、
 村上純子
 ・発行人 安藤隆一
 ・印刷・製本 西日本印刷

「昨年の夏号(20号)から、年四回(季刊)の発行
 をする事が出来た。また編集部も20代を中心とする
 若手のメンバーになり、タウン情報誌としてやっ

定着してきたように思われる。反面、オピニオンリーダー的な面が失われつつある。古くからの読者の要望に答えるためにも、もう少し編集部に幅を持たせたい。30代の有志諸子是非編集部に馳せ参じてほしい。(隆)」「(編集後記) 40 ページ)

25号 (1986年10月) 全40ページ

- ・特集 What's 図書館
- ・編集長 西墻直実 編集 津原孝則、河崎倫子、田中淳恵、寺町富貴子、岡田勝博、沢田保洋、尾崎真美、浅尾美佳、久野通子、桜谷浩章、石河和彦、森田昌子、上田典子、滝口美寿穂、村上純子、野崎肇、国丘はるひ、小椋淑子
- ・発行人 安藤隆一
- ・印刷・製本 西日本印刷

26号 (1986年12月) 全32ページ

- ・特集 とっとり飲み屋マップ
- ・編集長 沢田保洋 編集 津原孝則、河崎倫子、田中淳恵、寺町富貴子、尾崎真美、浅尾美佳、久野通子、桜谷浩章、石河和彦、森田昌子、滝口美寿穂、野崎肇、国丘はるひ、小椋淑子、荒木智子、西墻直実
- ・発行人 安藤隆一
- ・印刷・製本 西日本印刷

27号 (1987年3月) 全40ページ

- ・特集 春らんまんドライブガイド
- ・編集長 西墻直実 編集 津原孝則、河崎倫子、野崎肇、石黒智子、西原徳善、石河和彦、尾崎真美、梶川紀好、久野通子、桜谷浩章、森田昌子、沢田保洋、目栗かなえ
- ・発行人 安藤隆一 発行所 スペース編集室 鳥取市江崎町 61
- ・印刷・製本 西日本印刷

「発行人の A 氏に、編集部員募集の宣伝文を書いてくれと頼まれた。僕は、大学院を中退し、鳥取をはなれることとなった。大学には退学届は出しても、スペース編集室には、休学願を出そう。いつでも復帰したいのだ。スペースを編集することは、楽しくはない。唯、僕は、ひとつのメッセージを、スペースを通じて送ってきた。それは、「僕はなんとかやっているよ」と僕を知る人々に伝えたかったのだ。僕自身に限れば、不特定多数の読者を相手にスペースを作ってはいなかった。スペースの自由な雰囲気が、僕に合っていた。その自由さが、今やスペースの首を締めようとしている。スペースを応援してくれているあなた、今度は、あなたがスペースを造る番だ。

迷える子羊たちに力を貸してあげてくれ。」(西墻直実「編集後記」40 ページ)

28号 (1987年7月) 全36ページ

- ・特集 5万円で行った韓国
- ・編集 沢田保洋、津原孝則、寺町富貴子、滝口美寿穂、伊谷杉子、石河和彦、岡嶋啓子、長谷善幸、西原徳善、石黒智子、八木谷祐一、野崎肇、梶川紀好、勝見栄子、目栗かなえ
- ・編集協力 河崎倫子、西墻直実、尾崎真美、森田昌子、久野通子、桜谷浩章、藤縄つぐみ
- ・発行人 安藤隆一 発行所 スペース編集室 鳥取市江崎町 61
- ・印刷・製本 西日本印刷

「6月11日付の M 新聞に「タウン誌・スペース、いま存続の危機」という見出しの記事が掲載された。(中略)／しかし私は希望を失っている訳ではない。本誌でも紹介し、募集した「市民劇の会」の初顔合わせを先日行った。大半が二十代、三十代の若い人であった。「芝居の経験はないが、何かこの街でやってみたい、ガンバってみたい。そういう気持で参加しました。」こんな声が何人かのメンバーの口から聞えた。(隆)」「(編集後記) 36 ページ)

29号 (1987年10月) 全36ページ

- ・特集 初体験の中国
- ・編集 沢田保洋、津原孝則、寺町富貴子、滝口美寿穂、伊谷杉子、石河和彦、岡嶋啓子、長谷善幸、西原徳善、石黒智子、八木谷祐一、野崎肇、梶川紀好、勝見栄子 編集協力 河崎倫子、西墻直実、尾崎真美、森田昌子、久野通子、桜谷浩章、藤縄つぐみ
- ・発行人 安藤隆一 発行所 スペース編集室 鳥取市江崎町 61
- ・印刷・製本 西日本印刷

30号 (1988年2月) 全48ページ

- ・特集 SPACE とともにあなたの 10 年をふり返ってみませんか
- ・編集長 野崎肇 副編集長 西原徳善、伊谷杉子 編集 沢田保洋、津原孝則、西墻直実、寺町富貴子、滝口美寿穂、岡嶋啓子、長谷善幸、八木谷祐一、梶川紀好、勝見栄子、野田浩子 編集協力 河崎倫子、尾崎真美、谷重かおる、高浜厚己、桜谷浩章、井上美香、石河和彦、石黒智子
- ・発行人 安藤隆一 発行所 スペース編集室 鳥取市江崎町 61

・印刷・製本 西日本印刷

「たかが娯楽されど娯楽。映画『ラスト・エンペラー』を日本で公開するにあたり、南京大虐殺のシーンがカットされているという。なぜだ!? この10年の間にも、歴史教科書の記述をめぐって近隣諸国に反省を促されたことをもう忘れたというのか。まったく、日本人はどうして臭いものにフタをしようとするのだろう。戦争を倦まず悲惨と業苦を語り継ぐことこそ平和への歩みではないのか。(徳)」

「「とっとり市民大井戸端会議」「紙原四郎・スペース表紙原画テレフォンカード」「スペース卒業生大同窓会」この3本をスペース10周年の記念企画として考えている。(隆)」(「編集後記」48ページ)

31号(1988年7月)全40ページ

・特集 「スペース風」夏のすごしかた

・編集長 岡嶋啓子、山里美保 副編集長 野崎肇 編集 沢田保洋、津原孝則、西墻直実、寺町富貴子、長谷善幸、八木谷祐一、梶川紀好、谷重かおる、高浜厚巳、玉野康一郎、西原徳善、中家一郎、安藤隆一 編集協力 河崎倫子、桜谷浩章、井上美香、石河和彦、滝口美寿穂

・発行人 畑中恒信 発行所 スペース編集室 鳥取市江崎町61

・印刷・製本 西日本印刷

「発行人を交代する事にした。でも私は「編集部」を引退する訳ではない。なんとか片隅においてもらうつもりである。／若い人が育っているかどうか私にはよくわからない。でも、いつまでも私が頭には育つ人も育たないのでは。／今回の編集長は女性である。発行人も新しくなり徐々に新しいカラーを出してほしいと思っている。「老兵は死せず」(隆)」(「編集後記」38ページ)

32号(1988年9月)全36ページ

・特集 食欲の秋 これが野外料理だ

・編集長 西原徳善 副編集長 安藤隆一 編集 沢田保洋、津原孝則、西墻直実、寺町富貴子、長谷善幸、八木谷祐一、梶川紀好、谷重かおる、高浜厚巳、玉野康一郎、岡嶋啓子、山里美保、山口久美子、野崎肇、大西智代美、井上美由紀 編集協力 土井倫子、桜谷浩章、井上美香、石河和彦、滝口美寿穂

・発行人 畑中恒信 発行所 スペース編集室 鳥取市江崎町61

・印刷・製本 西日本印刷

33号(1988年12月)全36ページ

・特集 真冬の NAVIGATION

・編集人 西原徳善 デスク 安藤隆一 編集 沢田保洋、津原孝則、西墻直実、寺町富貴子、八木谷祐一、梶川紀好、玉野康一郎、山里美保、野崎肇、大西智代美、吉田典子、米原えつこ、小谷佐栄、中山規子、井上美香(コロ編集室) 編集協力 土井倫子、桜谷浩章、石河和彦、滝口美寿穂、岡嶋啓子、長谷善幸、尾崎真美

・編集所 スペース編集室 鳥取市江崎町61

・発行人 畑中恒信 発行所 スペース企画

・印刷・製本 西日本印刷

34号(1989年4月)全36ページ

・編集長 西原徳善、井上美香、安藤隆一 デスク 遠藤秀太郎、吉田典子 編集 津原孝則、西墻直実、寺町富貴子、八木谷祐一、玉野康一郎、大西智代美、小谷佐栄、中山規子、梶川紀好、山里美保

・編集室 スペース編集室(鳥取地区) 鳥取市江崎町61 コロン編集室(倉吉地区) 東伯郡北条町国坂1639-5

・発行人 畑中恒信 発行 スペース企画 鳥取市安長380-1(山陰急便内)

・印刷 中央印刷(株) 鳥取市南栄町34

35号(1989年7月)全32ページ

・特集 とっておきの夏

・編集長 西原徳善、井上美香、安藤隆一 デスク 遠藤浩明、吉田典子 編集 津原孝則、西墻直実、寺町富貴子、八木谷祐一、玉野康一郎、大西智代美、小谷佐栄、中山規子、山本利絵、清水早人

・編集室 スペース編集室(鳥取地区) 鳥取市江崎町61 コロン編集室(倉吉地区) 東伯郡北条町国坂1639-5

・発行人 畑中恒信 発行 スペース企画 鳥取市安長380-1(山陰急便内)

・印刷 中央印刷(株) 鳥取市南栄町34

(安藤隆一・岡村知子)